

岡山市立オリエント美術館研究紀要

21

岡山市立オリエント美術館所蔵ガラス・金属製品の蛍光X線分析

加藤慎啓・保倉明子・中井泉 (1-13)

クリ式土器とその意義

—岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて—

近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩 (15-50)

岡山市立オリエント美術館

2007

クッリ式土器とその意義 —岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて—

近藤英夫*・上杉彰紀**・小茄子川歩***

Kulli Ware and its Significance with an Introduction of the Collection
in Okayama Orient Museum

Hideo KONDO, Akinori UESUGI, and Ayumu KONASUKAWA

In this paper, the authors attempt to discuss the historical significance of the Kulli Ware that appeared in the later part of the third millennium BCE in southern Balochistan. Although the Kulli Ware has been known for a long time to archaeologists of South Asia, its historical significance has not been discussed in a full sense, since archaeological excavations in southern Balochistan have been limited in number after a pioneering work by A. Stein in the end of 1920's. This paper discusses the historical importance of the Kulli ware in Southwest Asia including the Indus Valley with description of some Kulli wares in the collection in Okayama Orient Museum.

1 はじめに

本稿では、岡山市立オリエント美術館（以下、オリエント美術館と略記）に所蔵されるクッリ式土器（Kulli Ware）について紹介するとともに、クッリ式土器がもつ歴史的意義について考察を加える。

次章において詳述するように、クッリ式土器は古くからその存在が知られながらも、ほとんど検討が加えられることのなかった南アジア先史時代の土器である。近年、正式な発掘調査を経たものではないながらも、古美術品として多くの資料が知られるようになり、その歴史的意義を問うことが重要な課題となりつつある。

結論から述べると、クッリ式土器はインダス文明¹⁾の時代にパローチスター

(Balochistan) 地方南部に消長した特徴的

な彩文土器であるが、インダス川流域とイラン高原南東部の双方をつなぐ地域において、両地域の社会に深く関わるかたちで展開したものである。ゆえに、単にパローチスター南部にとどまらず、前3千年紀後葉の西南アジア地域の社会的動向に深く関わっていることが想定される。この視点から当該時期の西南アジアに展開した「文明」社会の構造を理解する上できわめて重要な土器であるというのが筆者らの見解である。

オリエント美術館にはこのクッリ式土器の特徴を明確に示す資料が所蔵され、幸いにも筆者らに観察・検討の機会が与えられたことから、ここでその紹介を行なうとともに、クッリ式土器が前3千年紀の西南アジア社会の中で果たした役割あるいはその意義について考察することとしたい。

* 東海大学文学部 Tokai University, Faculty of Letters

** 関西大学文学部 Kansai University, Faculty of Letters

*** 東海大学大学院 Graduate School of Tokai University

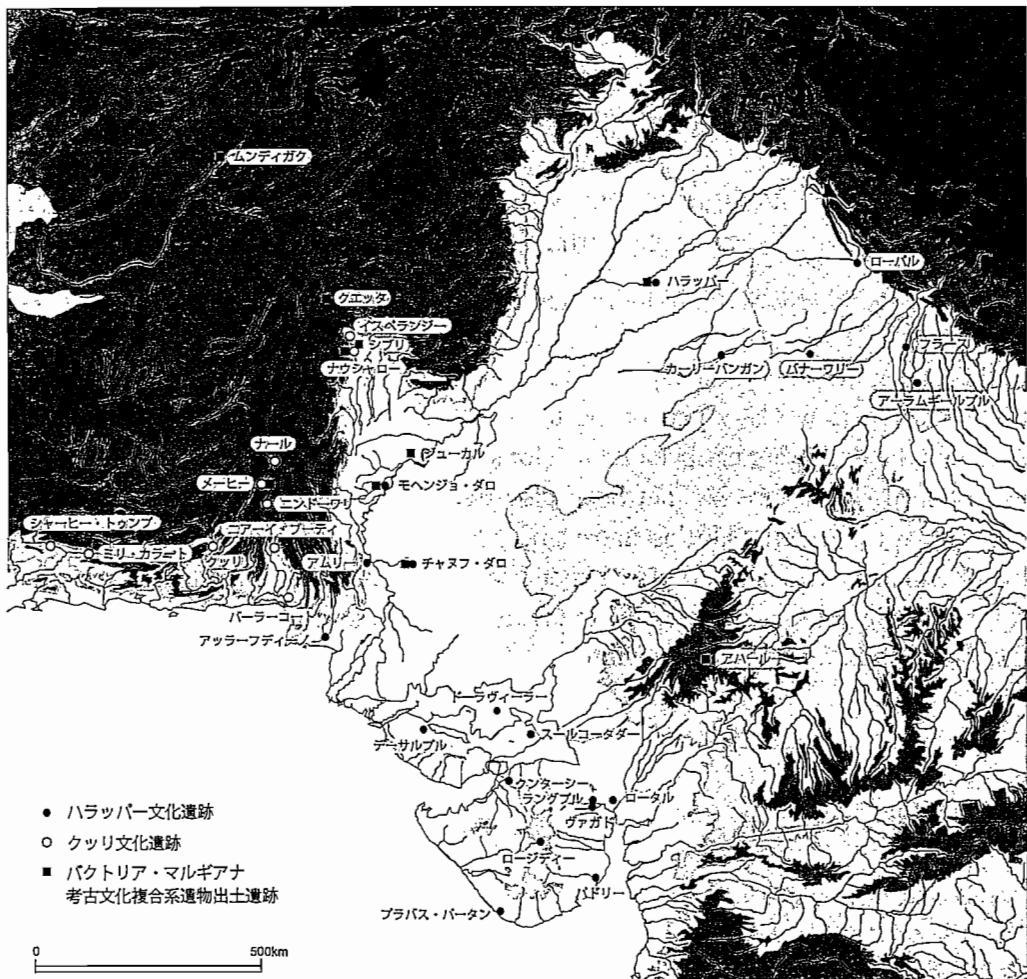


図1 クッリ文化およびハラッパー文化関連遺跡

2 クッリ式土器をめぐる研究抄史

クッリ (Kulli) 遺跡が発見・発掘されたのは1928年にさかのぼる。発掘調査を実施したのはA. Steinで、パローチスターーン南部の遺跡の踏査の一環として、クッリ遺跡の発掘調査を実施している (Stein 1931)。

Steinの記述にしたがって、クッリ遺跡の概要について記しておくと、Steinが遺跡を訪れたのは1928年3月のことで、約1週間ほどの期間の間に遺跡を構成するマウンドの平面図の作成およびマウンド北西部での試掘調査を実施している。マウンドは東西約274m、

南北約365m、高さ約9.15mを測る。マウンドの頂部を中心に建物遺構を構成する泥板岩積壁体がすでに露出し²⁾、クッリ式土器を含む土器片がその周辺に散在していた。このほかにもStein自身がパローチスターーン地方北部のモグール・グンダイ (Moghul Ghundai) 遺跡などで発掘した例に類似する積石墓群もマウンド北半部で発見されている。

出土遺物には、クッリ式土器のほかに、石皿・磨石³⁾、ラピス・ラズリ、瑪瑙、紅玉髓、黒色岩 (ジャスパーか)などの玉類、銅製品、金製品、骨 (貝) 製腕輪などが報告されている。また、土器についてまとめた数

量が出土したものに人物および動物の土偶があり⁴⁾、土器とともに「クッリ文化」を特徴づける遺物として知られている。

Steinが調査したクッリ文化に関連する今ひとつ的重要遺跡としてメーヒー遺跡がある。1928年3月上旬のクッリ遺跡の調査に引き続いだ、同年3月末にメーヒー (Mehi) 遺跡での短期間の試掘調査を実施している。このメーヒー遺跡の規模は約329m×301m、高さ約15mで、若干小さいもののクッリ遺跡とほぼ同規模を測る遺跡である。遺跡のマウンド頂部に露出していた遺構はクッリ遺跡で泥板岩が用いられていたのに対して、粘土と礫を混ぜ込んで壁体を築いている。発掘調査はマウンドの東半部で行なわれ、トレンチIVにおいて建物遺構の一部が検出されるとともに、その床面からクッリ式土器が出土しているとされる。また、クッリ遺跡出土例に共通する動物土偶の出土も報じられている。

このメーヒー遺跡で確認された遺構の中で注目されるのは数多く検出された埋葬址である。火葬に臥した人骨を土器、土偶などの器物とともに大形の土器の中に納めるタイプと、火葬骨をそのまま埋葬するタイプが確認されているが、トレンチI.8では現地表面下約1.20mのところで人骨片、灰、土器片を納めた大形の土器が検出され、さらにその下約0.30mのところで6個の頭骨が集積される形で検出されたという。後者の集積骨の中には幼児のものと推定される頭骨や成人に推定される骨が含まれるとともに、幼児用の銅製腕輪や土器も出土したという。また、集積骨の周辺には炭化物片や灰が散在しており、Steinはこの場所で火葬が行なわれたのち、骨を選別して集積させたと推定している。なお、BMAC (the Bactria-Margiana Archaeological Complex、バクトリア・マルギアナ考古文化複合) 系の土器もまた埋葬址と関係して出土している点は注目される。

このSteinのパローチスタン南部での調

査ののち、クッリ式土器は必ずしもその検討が充分になされてきたわけではない。Stein自身はパローチスタン地方から西のシースターン (Sistan) 地方にかけての踏査経験が豊富で、クッリ遺跡およびメーヒー遺跡の調査の際にも、そうした経験が活かされているが、両遺跡で発見された遺構・遺物の重要性を明確に論じるには情報が絶対的に欠落していた。両遺跡において同じくパローチスタン南部に広く分布するナール式土器が出土していないこと、Stein自身によるシャーヒー・トゥンプ (Shahi Tump) 遺跡での調査成果などを踏まえて、シャーヒー・トゥンプ遺跡下層・ジヨーブ (Zhob) 渓谷金石併用文化→クッリ文化→ナール (Nal) 文化という変遷を想定するにどまらざるを得なかったのである。

さらに、パローチスタン南部の調査がStein以降に停滞したことが大きな原因で、クッリ式土器の分布やその年代的位置づけ、あるいはその歴史的意義を検討するに充分な情報が得られたわけではなかったことも重要な要因であろう。

そうした中でS. Pigottは先史時代の南アジアを俯瞰する中でクッリ式土器を取り上げている (Pigott 1950)。彼はSteinが調査したクッリ遺跡およびメーヒー遺跡の土器資料を中心に検討を進める中で、クッリ文化が西はイラン高原からメソポタミア、東はインダス文明と深く関わり、とりわけ各地を結ぶ交易活動の中で活躍したことを指摘している。クッリ文化の年代に関しては、インダス文明と同時期とし、終末をシャーヒー・トゥンプ遺跡でのクッリ式土器の出土層位を参考に、インダス文明終末に近い年代を示唆している。

パローチスタン地方各地での調査経験が豊富なW. A. Fairervis Jr.は南アジア考古学の概説書である*The Roots of Ancient India* (1971)において自身が調査に携わったパローチスタン地方南部のラス・ベーラー (Las Bela) 地方の調査成果に基づき、パローチ

スターイ地方南部全体の文化変遷について見通しを述べている。ラス・ベーラー地方はクッリ遺跡やメーヒー遺跡の南東に位置し、アラビア海に面する狭隘な平原部を含む地域で、バローチスターイ地方の中でも肥沃かつ人口が密集する地域である。彼はこの地域においてニアイ・ブーティ（Niai Butti）遺跡や「エディト・シャハル・コンプレックス（the Edith Shahr Complex）」⁵⁾と名づけた遺跡群の調査を実施し、ナール文化からクッリ文化にかけての遺跡の消長について層位的・平面的に検討を行なっている。ニアイ・ブーティ遺跡では下層（I期）と上層（II期）に区分し、I期には薄手で幾何学文中心の彩文土器（ナール式土器（Nal Ware）も含む）が、II期には本稿でいうところのクッリ式土器やハラッパー式土器が出土することを確認している。彼の見解においては、このバローチスターイ地方南部の土器伝統全体が「クッリ式土器」と認識され、本稿で扱う狭義のクッリ式土器は「後期クッリ式土器（late Kulli Ware）」と呼んでいる。「前期クッリ式土器（early Kulli Ware）」とされるナール式土器や薄手の幾何学彩文土器については先ハラッパー文化期に、「後期クッリ式土器」についてはハラッパー文化期に位置づけるが、「後期クッリ式土器」の意義については特に論じていない。

1960年代前半には、バローチスターイ南部の山間地帯に位置するニンドーワリ遺跡の発掘調査がJ.-M. Casalによって行なわれている（Casal 1966）。典型的なクッリ式土器が出土し、一部の試掘溝からはクッリ式土器に先行する土器も出土したようだが、残念ながらごく簡単な概報しか公表されていない。

1980年代になって再びクッリ文化を正面から取り上げたのは、G. Possehlである（Possehl 1986）。PossehlはSteinが収集した資料（ニューデリー国立博物館蔵）を図化するとともに詳細に検討を加え、クッリ式土器

の年代をインダス文明期に位置づけ、その彩文土器によって表徴される文化（クッリ文化）をインダス文明の一地方的文化として把握している。このPossehlの評価はクッリ式土器の位置づけを考える上において重要で、彼はインダス文明を諸々の地域社会からなる連合体として理解する自身の見解の中で、クッリ文化をあくまでもインダス文明の一部として位置づけているのである。この点については後節において詳述するが、Possehlの見解に従うならば、クッリ文化は「インダス文明」という地域社会の枠組みの中に限定された存在ということになる。

1986年から開始されたナウシャロー（Nausharo）遺跡の調査はクッリ式土器あるいはクッリ文化の編年的位置づけについて重要な情報を提供することとなった（Jarrige, J.-F. 1994, 1997）。このナウシャロー遺跡はバローチスターイ高原の東縁部の中央に位置するカッチー平野に所在する遺跡で、メヘルガル（Mehrgarh）遺跡Ⅶ期併行期からインダス文明併行期にかけての文化層序が確認されている（I～IV期）。そのうちIV期からハラッパー式土器、BMAC系土器とともにクッリ式土器が出土しており、先行するIII期の土器様相を勘案して、インダス文明の後半期に位置づけられている。発掘調査を指揮するJ.-F. Jarrigeの年代観によれば、前2200～2000年頃に位置づけられる。層位的にクッリ式土器が検出されたことは、長く定点をもたなかつたクッリ文化の位置づけにとってきわめて重要であることはいうまでもないであろう。

さらに近年調査が行なわれたマクラーン（Makran）地方のミリ・カラート（Miri Qalat）遺跡とバローチスターイ地方南部のナール（Nal）遺跡でもクッリ式土器に関連する資料を出土する層が検出されている。ミリ・カラート遺跡ではIV期にクッリ式関連土器の出土が報じられている（Besenval 1994）。IV期にはハラッパー式土器も出土しており、

クッリ式土器がハラッパー式土器に併行することを示唆している。ナール遺跡では充分な資料が公表されていないため詳細は不明であるが、クッリ式土器に類似する動物文を描いた土器がⅢ期には出土し、Ⅳ期にはクッリ式土器に関連する資料が報告されている (Franke-Vogt 2005; Franke-Vogt and Ibrahim 2005)。ナール遺跡の調査を率いる Ute Franke-Vogt はⅢ期を初期ハラッパー段階終末からハラッパー段階への移行期前後に描き、Ⅳ期を前 3 千年紀後葉に位置づけている。Ⅳ期からは典型的なクッリ式土器は出土していないとのことであるが、クッリ式土器が成立する時期のバローチスタン地方南部の地域編年の詳細を考える上できわめて重要な調査成果をもたらしつつある。

このように Stein が調査した資料をもとに クッリ式土器の位置づけが模索され、インダス平原やイラン高原、メソポタミアとの関係が注目されてきたが、近年の発掘調査に伴う クッリ式土器の層位的検出はそうしたかつての研究を補強するとともに、地域の遺跡の動態の中でクッリ式土器の展開を位置づける必要性を喚起しているといつてよいであろう。これら近年の調査成果は充分に公表されているとはいいがたく、今後クッリ式土器の理解が大きく変わる可能性も否定できないが、本稿ではオリエント美術館に所蔵される資料をもとに、クッリ式土器の特徴を検討し、近年の調査成果を踏まえてクッリ式土器の意義を考えることとする。

3 岡山市立オリエント美術館所蔵資料の検討

岡山市立オリエント美術館に所蔵されるクッリ文化関連の資料には、土器と動物土偶がある。動物土偶に関しては、今後改めて詳細を検討し、確実にクッリ文化に伴うと判断される資料を紹介することしたいが、所蔵の土器にはクッリ式土器の典型資料として 5 点、

クッリ式土器に関する資料 2 点が含まれる。

詳細については以下論じていくこととするが、クッリ式土器の典型資料としたのは胴部中央に水平方向に彩文帯をめぐらし、そこには大きな円形の眼の表現をもつ動物を描いた資料である。クッリ遺跡の発掘調査では、こうした特徴的な動物表現をもつ資料以外にもさまざまな幾何学文を施した土器が採集されているが、厳密な意味で両者が同時期の所産かどうかが判断できる情報は得られておらず、本稿でクッリ式土器という名称において記述するのは大きな円形の眼を特徴とする動物表現を描く土器に限定しておくこととしたい⁶⁾。

クッリ式土器に関する資料としたのは、上述の大きな丸い眼をもつ動物表現がなく、小形のヤギを狭い彩文帯に連続的に表現する一群である。後述するように、いくつかの点でクッリ式土器とは異なっており、筆者らの見解ではクッリ式土器に先行する段階の土器型式と考えられる。

(1) 彩文要素の概要 (図 2)

以下、それぞれの資料の観察結果を個別的にまとめていくことにするが、記述の便宜上、まずクッリ式土器を特徴づける文様について若干の整理を試みておくこととする。後述のように、クッリ式土器には主文様帶に大きく描かれる動物文と植物文のほかに、副次的な幅狭文様帶や主文様帶の動物文・植物文の周囲に配される小形文様がある。

動物文にはコブウシ、ヤギ、ネコ科の動物、魚がある。それぞれの動物は明確に描き分けられるとともに、動物の身体的特徴が的確に表現されている。コブウシは大きな角とコブの存在からその同定に疑問の余地はないが、ヤギとしたものに関してはアイベックス、ブラックバックなどの可能性もある。この点は主文様帶に大きく描かれるものであれ、幅狭文様帶に小さく描かれるものであれ同様である。ネコ科の動物としたものは、トラ、チー

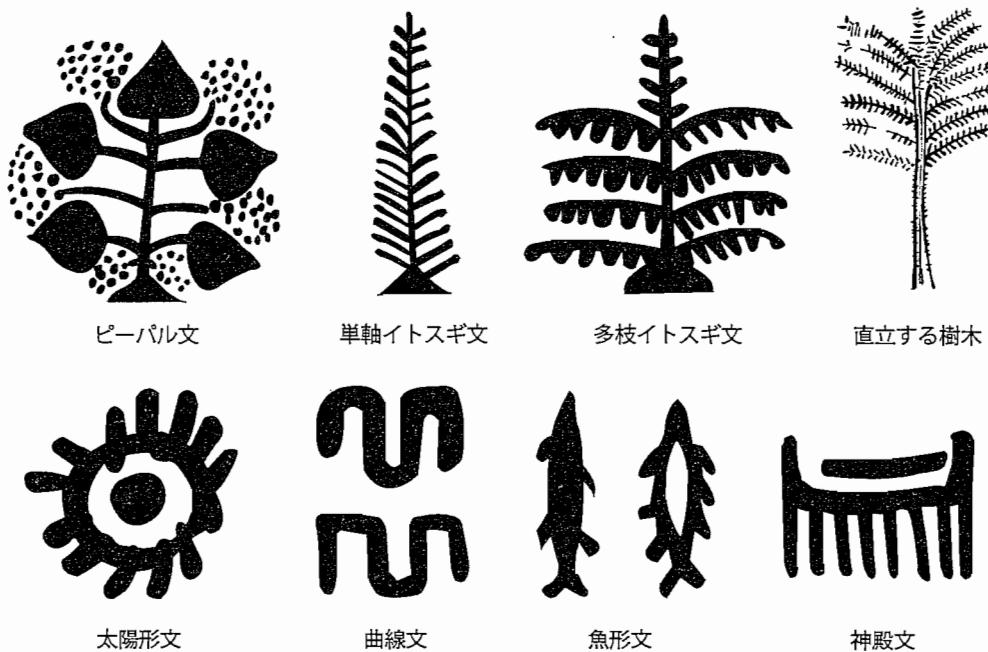


図2 オリエント美術館所蔵資料にみられる文様要素（動物文以外）

ター、ヒョウなどの候補が挙げられるが、その特定は容易ではない。

動物文の描出に関して特徴的であるのは、胴の輪郭線の内部に未彩部分を残し、直線文等を充填するという手法である。この未彩部分については、必ずしも適切な表現ではないが、「透かし」という用語で表現することとする。

魚に関しては主文様帶に大きく描かれる動物文・植物文の周囲に小さく描かれるが、資料全体を見渡すと2つのタイプがあることに気づく。いずれもアーモンド形に鱗を表現するが、一つは輪郭線内部を黒く塗り潰し、今ひとつは輪郭線内部を未彩とする。出現頻度としては、前者が圧倒的で、後者は1ヶ所のみである。

植物文には、ピーパル (*pipal*)、イトスギ、直立する樹木がある。ピーパルはインドボダイジュを意味する言葉で、ピーパルを彩文の意匠とするのは先ハラッパー文化期以来イン

ダス文明期にいたるまで広く行なわれている。ピーパルの葉は時期・地域を超えて宝珠形あるいはハート形に表現されており、クリ式土器にみられるピーパル文もその描写の特徴を明確に示している。

イトスギとしたものには、まっすぐに伸びる幹だけからなる表現と中心の直立する幹から左右に彎曲する枝が派生する表現があるが、いずれも幹あるいは枝からひげ状に短線を描くという特徴がある。実際にイトスギかどうかは不明であるが、この樹木表現はイラン高原東南部において特徴的にみられるものである。ここではあくまでも記述の便宜上の目的で「イトスギ文」とし、中心の幹のみからなる表現を「単軸イトスギ文」、左右に枝が派生する表現を「多枝イトスギ文」と呼び分けることとする。

直立する樹木の表現は資料③にのみみられるもので、これまですでに資料化してきたクリ式土器の類例においても見出すことが

できないものである。まっすぐに伸びる幹の中ほどから左右に枝が派生し、葉を茂らせた表現としている。

動物文・植物文の周囲に配される小形文様には、太陽形文、曲線文、「神殿文」がある。太陽形文は環の中心に点文を描き、環の周囲に短線を放射状に描く。曲線文としたのは凸部が2ヶ所、凹部が1ヶ所からなるものが多く描かれているが、一部には凸部を3ヶ所、凹部を2ヶ所とする場合もある。ヘビを簡略的に意匠化した可能性もあるが、即断し得ない。「神殿文 (temple motif)」とした意匠は「小屋文 (hut motif)」とも呼ばれ、何らかの建築物の正面観を意匠化したといわれるものである。イラン高原東南部やペルシャ湾岸のファイラカ島などで製作址が確認されているクロライト製容器に代表的な表現例がある。バローチスタン高原では初期ハラッパー段階終末（ナウシャロー遺跡II期）からハラッパー文化前期のハラッパー式土器に彩文として表現されたものがあるが（Quivron 2000）、左右の輪郭線の間に弧線を描き、弧線の下位に櫛歯状の縦位平行線を描く。こうした表現手法から「櫛形文 (comb-like motif)」と呼ばれることもある（Quivron 2000）。オリエント美術館資料では③にのみ表現されているが、上述のハラッパー式土器の表現例に類似する特徴をもつ。ただし、左右の縦線をつなぐ弧線の上位に横線を加えるという特徴がある。

(2) クッリ式土器

①大形直口鉢（図3-1・図6-1）

完形の大形直口鉢である。輪高台状の底部から斜め上方に開き、屈曲部を介して胴部上半へといたる。胴部上半は直線的にわずかに内傾しつつ伸び、口縁部は短くわずかに外反する。口唇部は丸く仕上げられている。口径18cm、器高14.8cm、屈曲部径18.4cm、底径9.9cmを測る。器壁の厚さは胴部上半で

0.8cmである。胎土は精良緻密、色調は淡橙色を呈する。

内面から外面口縁部よりやや下がった位置までは回転横ナデ痕が観察できるが、屈曲部より上位の胴部上半は板状工具を使用したナデ調整のうちに指ナデ調整によって仕上げられている。この部分は板ナデ調整による擦痕が部分的に観察できるものの、全体として平滑に仕上げられている。主文様帶の彩文を描くための器面処理であろう。屈曲部以下の胴部下半は非連続的な回転ナデ調整が施されている。底部は輪高台状を呈するが、高台の作出にあたっては粘土を付加し、底面の中央部を回転ナデによってわずかにくぼませることで輪高台状に仕上げている。以上の観察により、胴部下半と胴部上半を別工程で成形したのち底部を作出し、胴部外面を板ナデ+指ナデ調整によって平滑に仕上げ、口縁部外面から内面は回転力を利用した連続回転ナデ調整によって仕上げていることがわかる。屈曲部以下の胴部下半については底部の高台作出のための粘土を貼りつけたのち、ロクロまたは回転台上に倒置し、高台の成形に相前後する段階で調整を行なったと考えられる。

次に彩文についてみると、彩文に先行して白色がかったスリップを薄く塗布している可能性があるが、器面は明確に白色を呈するにいたっていない。口縁部直下には幅の広い黒色帯をめぐらし、その下位に6条からなる平行黒線をめぐらす。また、胴部下半の屈曲部の上位にも6条の平行黒線をめぐらし、胴部上半の平行線との間を主文様帶とする。

主文様帶には右向きのコブウシとピーパルを交互に3単位で描く。コブウシとピーパルは両者が一体の存在であるかのように、3本の平行線によってつながれた表現となっている。コブウシは頭部の大部分を占める丸い眼の表現を特徴とし、三日月状の角を載せる。胴部には矩形およびアーモンド形を2つ組み合わせた透かしがあり、前者には縦位の平行

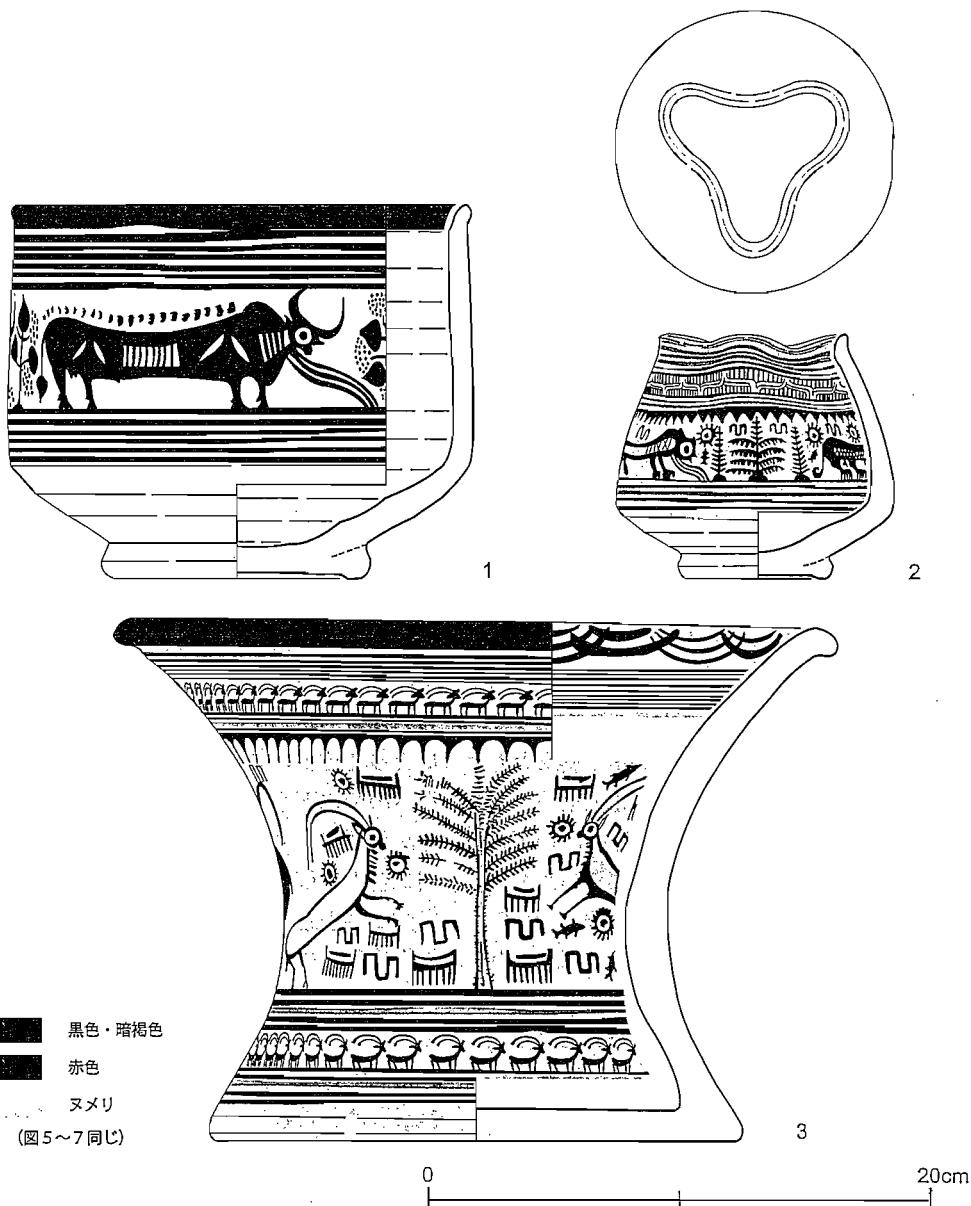


図3 岡山市立オリエント美術館所蔵土器 実測図 (1) (1:3)

黒線を充填する。コブウシの描出にあたっては、まず輪郭を黒線で描いたのちに内部を塗り潰す。また、コブウシの背中の輪郭に沿つて小形の横転曲線文を列状に描く。

ピーパルは中心の茎から左右に枝分かれし、それぞれの先端に葉を表現するが、3葉が1ヶ所、5葉が2ヶ所である。さらに、ピーパ

ルの葉の間にも左右に枝が分岐し、その先に列点を円形に描いており、何らかの花の表現とも考えられる。

②三葉形口縁直口鉢 (図3-2、図6-2)

口縁部を上面からみて三葉形に成形する直口鉢である。焼成前の最終段階 (彩文の施文も終了した段階) において口縁部を変形させ

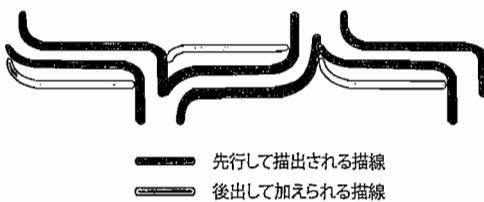


図4 ②にみられる階段文の描出工程

ており、変形にあたっては凹部に指を押し当てたことが、表面に残る指紋の存在からわかる。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。胴部は若干丸みを帯びた下膨れ状を呈する。胴部下半には屈曲部があり、底部へと続く。底部は外面がわずかにくぼむ輪高台状を呈しており、その特徴は①に共通する。輪高台は粘土貼り付けによる。口径は突出部間で7.5~7.6cm、胴部最大径11.1cm、器高9.7cm、底径5.6cm、器壁厚は胴部上半で0.5~0.7cm、胴部下半で1.0cm前後を測る。胎土は精良緻密、色調は均一ではなく、黄白色~淡橙色~橙色を呈する。

内外面ともに回転ナデ痕が観察できるが、全体的に平滑に仕上げられている。屈曲部を境に上下でナデ調整の単位が異なる可能性があり、また屈曲部にはナデ調整に先行して面取り状のケズリを施している状況が観察できる。底部外面の凹部には回転ナデ痕が残る。

次に彩文についてみると、彩文に先行して白色スリップを薄く塗布し、口縁部にやや幅広の帯状文をめぐらし、その下には赤色および黒色の平行線で、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する。口縁部文様帯には階段状の平行線を水平方向に連接させた文様とその空白部分に充填される縦位平行線文を描くが(以下、「階段文」とする)、階段文は単純に平行線を階段状に描くのではなく、左右からの黒線を段違いに描き、そのちさらに黒線をその上下に加えるという描出法を探っている(図4)。

胴部の主文様帯には右向きのネコ科の動物

と多枝イトスギ文を2本の単軸イトスギ文で挟んだ植物意匠を1単位として、それを3単位にめぐらす。ネコ科の動物とその右側の単軸イトスギ文は3本の平行黒線でつながれた表現となっている。ネコ科の動物は①同様に頭部の大半を占める大きな丸い眼の表現を特徴とし、胴部に大きく透かしを設けて、頸の辺りには縦位平行線を、胴部側には斜格子を充填する。足には鋭い爪を描いており、明らかにコブウシとは細部にわたって描き分けがなされている。また、後肢の間には睾丸、後肢と前足の間には乳房のような突起が描かれている。多枝イトスギ文の中軸上端左右には曲線文を配する。

主文様帯の上端にはその上部の平行黒線に接するように下向きの鋸歯文を描き、ネコ科の動物の背上には太陽形文、曲線文、魚形文を小さく配する。下半身側には太陽形文と曲線文を交互に配し、上半身から頭部の側には魚形文を複数描く。また、尾の付近には1個の魚形文を配置している。こうした配置は主文様帯を構成する3単位で共通しており、彩文要素の配置に一定の規則が存在する可能性を窺わせている。

なお、底部と内面を除いて、外面の表面には特有のヌメリが観察され、彩文を施したのちに何らかの液体を塗布していることがわかる。こうした液体の塗布は③・④にもみられるが、土器製作当初のものか判然としない。

③鼓形鉢(図3-3、図6-3)

底部から大きく彎曲して胴部中位でくびれ、口縁部に向かって外反して開く器形を呈する。鼓状の器形を呈することから、ここでは鼓形鉢と呼ぶこととする。底部は大きな平坦面を有し、口縁部は若干外面側に突出させて、端部を丸く仕上げる。口径27.1cm、胴部最小径15.3cm、底径20.8cm、器高20.5cm、器壁厚1.4~1.7cmを測る。胎土は精良緻密、色調は淡橙色~黄褐色を呈する。

内面の底部に近い部分ではナデ調整が粗雑

であるが、外面を含むそれ以外の部分では丁寧なナデ調整によってきわめて平滑に仕上げられている。底部外面は回転ナデで仕上げるが、中心部分のみ不定方向のナデ調整で仕上げている。

文様についてみると、口縁部内面には下段に9条の平行黒線がめぐらされ、その上位の口縁端部にかかる部分には3条1組の平行黒線からなる連弧文を水平方向に一部重複させながらめぐらす。

外面では、口縁部に幅広の帯状文を描き、その下位にそれぞれ6条および4条の平行黒線（ただし下段の4条の平行線の中には赤色で施した可能性のある1条が含まれる）によって画される幅狭文様帶に右向きの小形ヤギ文を密接して連続的に配する。その下位の胴部中央部には、1条の黒線文と内面を黒く塗りつぶす連弧文によって上端を、中央に1条の赤線を挟む4条の黒線文（計5条）によって下端をそれぞれ画される主文様帶を大きく設ける。

主文様帶には直立してまっすぐに伸びる樹木とその左右に配される対向するヤギ2頭を単位とする意匠が2単位に大きく描かれている（便宜上、第1・2単位に分けて記述する）。樹木は先細り状に伸びる幹とその左右に派生する枝からなり、枝には短線で葉の表現がみられる。幹は輪郭を黒線で描いたのち、内部を赤色顔料で塗彩し、さらに黒輪郭線の上から列点を加える。ヤギは第1単位では四肢で立つか、第2単位においては、樹木に向かって後肢で立ち上がる姿勢で描かれている。いずれも大きな丸い眼と後方に向かって大きく彎曲する角を特徴とする。角は黒線で描出したのちに、列点文を加える。また、頸から胸にかけては長く伸びた毛の表現がみられる。胴部は輪郭を黒線で描くが、その内部を赤色で塗り潰す（ただし、第2単位左側のヤギでは内部を赤彩しているかどうか現状では判然としない）。

第1単位では向かって左側のヤギの背後斜め上に後肢で立ち上がってヤギに襲い掛かるかのような姿勢をとるネコ科の動物が描かれている。その表現は姿勢の違いを除けば②の表現例に同様であるが、胴部に充填される文様が斜格子ではなく横転V字形文である。また、同じく第1単位では樹木とヤギの間に空間に、ヤギの方を向く鳥が左右1羽ずつ描かれている。大きな胴と小さく表現される頭部、2本の肢の表現があり、飛んでいる状態ではなく地面に止まった姿勢を表現する。胴部には斜線を充填する。

樹木およびヤギの周囲には、太陽形文、曲線文、魚形文のほかに櫛歯状の意匠がみられる。これは簡略化が著しいものの、イラン高原からメソポタミアにおいて流通したクロライト製容器に典型的にみられる神殿の入口を正面からみて意匠化したといわれる「神殿文」と考えられる。曲線文は本例では丸い彎曲を示さずに、意図的に角張った形で描かれている。文様全体を一筆で描出すのではなく、一辺ずつ直線を引いて全体を構成するという特徴が認められる。彎曲する曲線文との違いに何らかの有意な意味があるのかどうか判然としない。

第1単位ではこれらの文様の配置には樹木を挟んでおおまかな左右対称性がみられる程度であるが、第2単位ではより顕著な左右対称性が認められる。また、第1単位ではネコ科の動物および樹木の右側のヤギ、第2単位では樹木の右側のヤギの下半身付近において魚形文が集中的に表現される傾向が認められ、魚形文と動物の間で意味上の連関性が意図されている可能性が高い。

また、主文様帶の下位にも平行黒・赤線で区画される幅狭文様帶に右向きの小形ヤギ文を連続的に充填する。

口縁部内面から外面全体に②・④ほど顕著ではないものの、ヌメリ状の光沢がみられる。
④鍔付広口短頸壺（図5、図6-4）

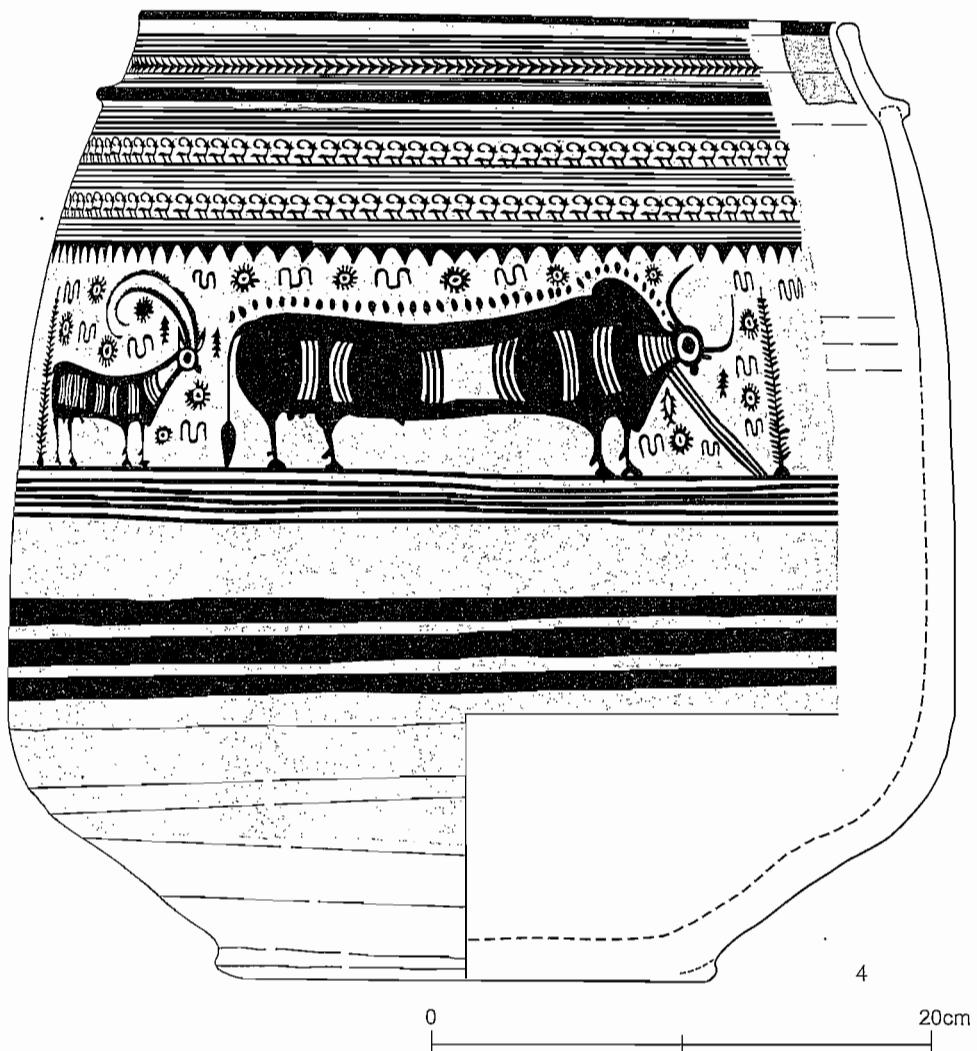


図5 岡山市立オリエント美術館所蔵土器 実測図(2)(1:3)

口縁部から若干下がった位置に鈸状の突帯をめぐらせる広口短頸壺である(以下、「鈸付広口短頸壺」とする)。突帯は断面形が略台形を呈する。突帯には垂直方向の穿孔はみられない。口縁部は若干肥厚し、端部は丸みを帯びた平坦面に仕上げられている。胴部は下膨れ状で、明確な屈曲部は設けないものの、胴部下半に最大径をもつ。底面は粘土を貼り付け、円盤高台状とする。口径28.3cm、胴部最大径38.0cm、器高38.4cm、底径19.7cm、器壁厚0.7~1.2cm(計測可能部分に限る)を

測る。重量は約11kgである。胎土は精良緻密、色調は淡橙色~黄橙色を呈する。

内面には回転ナデ痕が全面に残り、底部付近は段状にくぼむ。胴部上半外面はナデ調整によってきわめて平滑に仕上げるが、胴部下半には上半部との接合に伴う横ナデが、また底部付近には円盤高台成形時の横ナデが観察できる。両者の横ナデの間の部分には、ナデ調整が施されずに表面が粗い状態に残されており、胴部下半から高台貼り付け以前の底部についてでは型による成形も推測される。底面

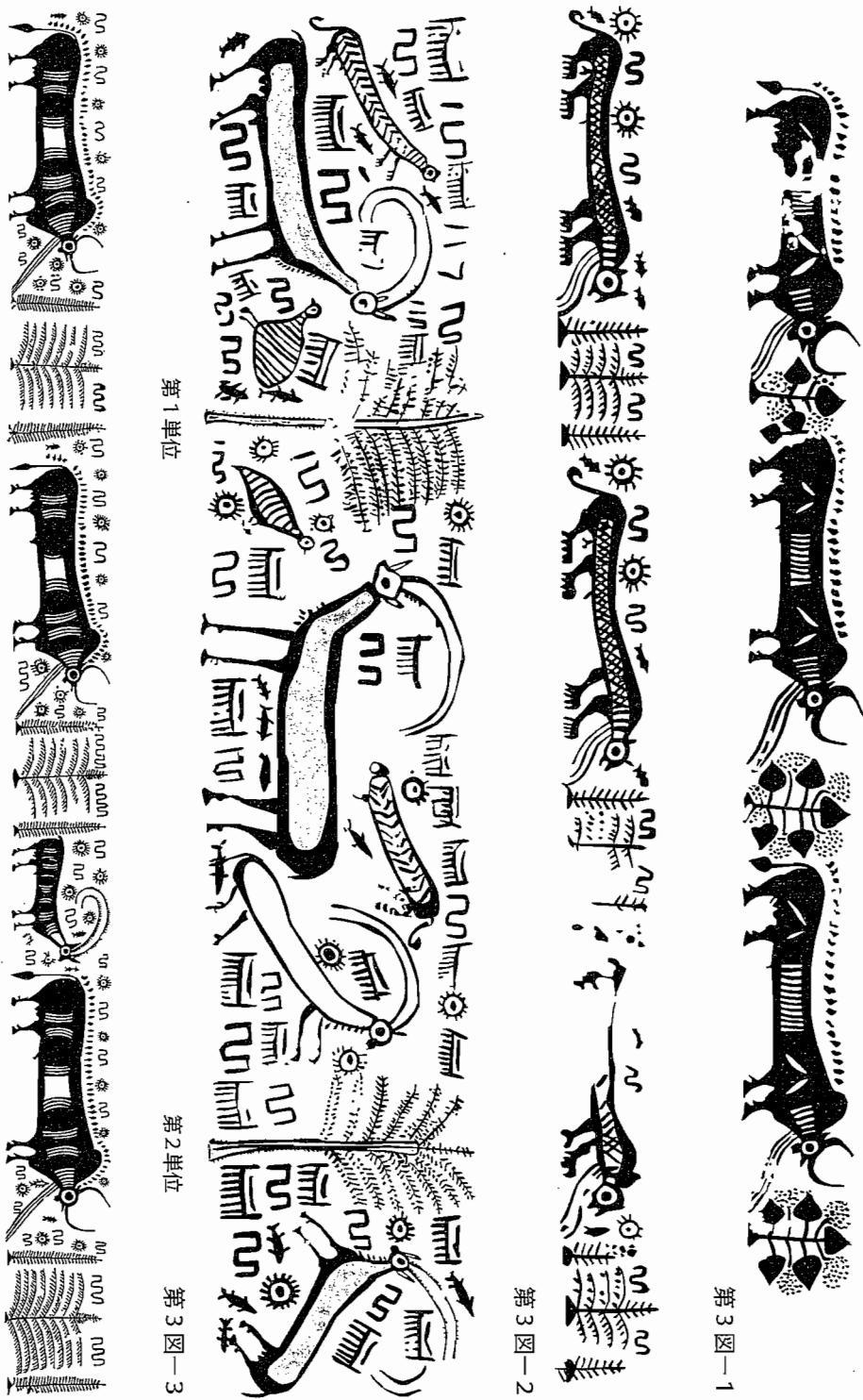


図6 岡山市立オリエント美術館所蔵土器 主文模帶展開図

第5図-4

外面はナデ調整によって平滑に仕上げられて
いる。

外面の突帯に対応する内面の位置には段が認められ、突帯を境として胴部と口縁部で成形時の粘土単位が異なることがわかる。また、突帯と口縁部の境界部分での観察から、突帯を胴部上端の擬口縁線上に貼りつけたのち、その上に口縁部を構成する粘土塊を貼りつけて接合していることが推測できる。

文様についてみると、口縁部には外面から内面にかけて黒色帯が描かれ、外面ではその下部に突帯上端にかかる位置まで平行黒線をめぐらし、その中位に設けられた幅狭の文様帶には右向きの矢印形の文様を連接して充填する。突帯上にも黒色帯が描かれ、黒色帯下位には5条の平行黒線を3段に配し、それぞれの間に設けられた2段の幅狭文様帶には右向きの小形ヤギ文を連接して描く。小形ヤギ文は弧線に直線を加えた単純な描出法である。

これら3段の平行黒線のうち最下段のものと胴部中位にめぐらされた6条からなる平行黒線の間に主文様帶を大きく設け、コブウシ、ヤギ、イトスギ文から構成される意匠を描く。
②同様にイトスギ文は多枝のイトスギ文を2本の単軸イトスギ文で挟むという構成で、右向きに描かれるコブウシはそのすぐ右側の単軸イトスギ文に3本の平行黒線でつながれるという構成を示す。中央の多枝イトスギ文の中軸上端左右には曲線文を配する。

コブウシは大きな丸い眼と大きく彎曲する角をもつ。胴部には平行弧線を充填する透かしが描出されている。コブの部分から尾にかかる部分までは、背中の輪郭線に沿って横向きの小形の横転曲線文または点文が列点状に描かれる。さらにコブウシの周囲には太陽形文、曲線文、魚形文が配されるが、背上側には太陽形文と曲線文が交互に配され、尾のうしろに魚形文が描かれるという配置がみられる。頭部とイトスギ文の間には太陽形文、曲線文、魚形文が描かれるが、魚形文は1頭に

のみみられる。

ヤギは1ヶ所にのみコブウシのうしろに描かれている。コブウシ同様に大きな丸い眼と胴部の平行弧線をもつが、頭部には後方に向かって大きく彎曲する角が2本描かれる。角は輪郭線を描いたのち、その上から列点文を加えている。また、背上には太陽形文、曲線文、魚形文が配される。

なお、口縁部内面では端部の黒色帯に先行して赤色顔料を塗布している可能性がある。また、胴部下半の屈曲部より上位の口縁部にまでいたる範囲には特有のヌメリがみられる。なお、内面にはスリップは施されていない。

⑤方形杯(図7-5)

底面が円形であるのを除いて、全体的に横断面を方形に成形するという特徴的な形態を有する杯である(以下、「方形杯」とする)。また、側面形も底部から大きく弧状に内彎し、口縁部に向かって再び開くという器形である。口縁端部は丸く成形する。底部が円形を呈しているところから、本来は横断面円形に成形したのち、方形に変形させたと考えられる。隅角部の稜線は胴部下半では緩く、胴部上半から口縁部に向かってより明確な横断面方形となる。口縁部では一辺8.2cm、胴部最小部で一辺3.1cm、底径8.8cm、器高15.9cm、器壁厚は0.5~0.9cm(計測可能範囲に限る)を測る。胎土は精良緻密、色調は淡褐色を呈する。

外面は縦位のナデ調整によって平滑に仕上げる。内面は下半において凹凸著しいシボリ痕を残し、上半には横方向のナデ調整の痕跡が観察できる。口縁部に近くなればなるほど、内器面のナデ調整は丁寧となり、平滑性が増している。また、隅角部付近では隅角部を明確に作り出すために縦位のナデやヘラ先による浅い沈線が施されている。これらの状況もまた横断面円形に成形したものとのちに方形に変形させた可能性を強く支持している。

また、製作工程に関して注目されるのは、底部外面に残る回転糸切痕(左回り)の存在

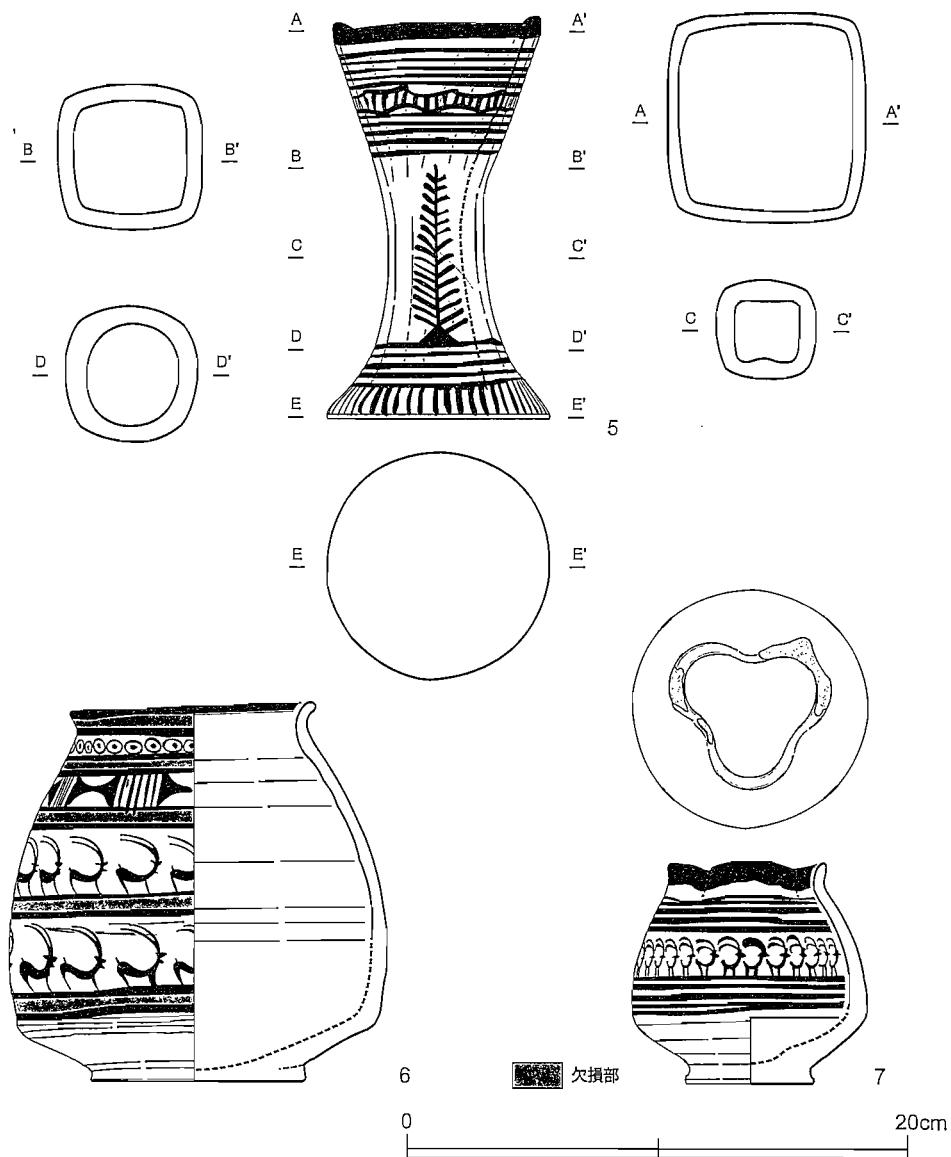


図7 岡山市立オリエント美術館所蔵土器 実測図(3)(1:3)

である。どの程度まで第一次成形の段階でロクロの回転力を利用しているのか不明であるが、少なくともロクロ上に成形途中の土器を据え、回転力をを利用してシボリによる変形を行ない、最終的に回転糸切手法によってロクロ盤から切り離し行なっていることは確かである。

彩文についてみると、彩文に先行して白色スリップを施したのち、平行黒線によって文

様帶を区画する。口縁部には幅広の帶状文をめぐらし、その直下から胴部上半にかけては平行黒線をめぐらすが、その中位には幅狭の文様帶を設け、連弧文と縦位の平行線を組み合わせた文様を描く。胴部下半にも5条からなる平行線を描き、上位の平行線との間に主文様帶を設ける。この胴部中央の主文様帶には、各面に単軸のイトスギ文を大きく描く。下端には三角形を描き、その中央から上に向

かつてイトスギの中軸を伸ばし、その左右に短線を配して、全体を構成する。その表現は②・④にみられる単軸イトスギ文と共通する。底面付近には縦位の平行線を描いている。

(3) クリッリ式土器関連資料

⑥広口短頸壺 (図7-6)

この土器はクリッリ式土器の範疇からは外れるが、上述のクリッリ式土器の幅狭文様帯に表現される例に共通するヤギ文を描くことから、ここで紹介する。広口短頸壺で、短く外反する口縁部から下膨れ状を呈する胴部、そして胴部から屈曲部を有してつながる平底の円盤状高台からなる。胴部下半に屈曲部をつくりて最大径とする器形はクリッリ式土器に共通するが、器壁厚が0.3~0.5cmとクリッリ式土器に比較して著しく薄く、また、底部は輪高台状ではなく平坦に仕上げられるという点でクリッリ式土器とは明確に異なる。口径9.6cm、胴部最大径15.1cm、底径8.5cm、器高15.1cmを測る。胎土は精良緻密、色調は露胎部分が明橙色、外面の白色スリップ塗布部分が若干橙色がかった白色を呈する。②・④にみられた文様帯部分のヌメリはない。

内面から肩部外面にかけては回転ナデ痕が観察できるが、胴部中位には軽微な擦痕がみられ、板などの硬質工具で器面を調整したのち、ナデを加えている可能性がある。彩文の施文を意図した器面調整と考えてよいであろう。胴部下半の屈曲部では面取り状の横ケズり痕が観察できるが、これは屈曲部の上位と下位を接合したことに伴うものと推測される。また、屈曲部より下位の部分には細かな亀裂が表面に多くみられるが、これらの亀裂は焼成前の乾燥時に正位に置いていたため、胴部の粘土からの荷重によって生じたものと考えられる。底部は粘土を貼りつけて円盤高台状に成形し、外面を粗い同心円状のケズり調整で仕上げている。また、底部高台側面にもケズりを加えている。

内面は上述のように底部から口縁部にまでクロ回転利用によるナデ調整が認められるが、口縁部と胴部ではナデの強さに明らかな違いが認められることから、胴部と口縁部ではナデ調整の単位が異なると考えられる。胴部ではナデの幅は2cm程度。下半部には外面屈曲に対応する位置とその上2cmほどのところに粘土接合に伴うと考えられる接合痕が残る。

外面には白色スリップを薄く施したのち、上下2本の黒線の間を赤色顔料で塗彩したものの一組の境界線として、4段の文様帯に区画している。頸部直下の最上段の文様帯には環の内部に円文を配した文様を連接して配し、その下の肩部文様帯には弧線と縦位平行線を組み合わせた文様を描く。下2段のやや幅広の文様帯にはそれぞれに右向きのヤギ文を連続的に描く。ヤギ文は弧線を基調として角から胴部を描き、それに点・線を加えて耳・顔・尾・肢を描出する。その特徴はクリッリ式土器の小形ヤギ文に共通する。内面には白色スリップは施されていない。

なお、胴部の文様は全体の1/3程度を新しく塗りなおしている。明らかに左右のオリジナルと判断される部分とは筆致が異なり、稚拙である。また、この補修部分で塗彩が膜状に剥がれている。明確な補修痕が観察できないが、内面では外面の補修部分に対応する接合痕が観察できないことから、彩文補修部分は割っていたのではなく表面が剥離した状態であったところに石膏を入れて形を整えたのち、表面に新しく彩文を描いたと考えられる。

⑦三葉口縁直口鉢 (図7-7)

②のクリッリ式土器にもみられた口縁部を上からみて三葉形に成形する直口鉢であるが、⑥同様に胴部にヤギ文を連続的に施すという特徴がある。その全体的な器形は②に共通するが、口縁部の外反が②に比して長く、胴部もより外方に膨らんでいる。底部についても

②が輪高台状であるのに対し、胴部からくびれをもつ円盤高台である。器壁についても胴部では②よりも2mm程度薄い。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。口縁部は突出部分間で6.7cm、胴部最大径9.4cm、底径5.0cm、器高8.9cmを測る。胎土は精良緻密、色調は均質ではなく橙白色～淡橙色を呈する。②・④にみられた文様帶部分のヌメリはない。

三葉形を呈する口縁部は、②同様に円形に成形したのち側面から力を加えて変形させている。外面は胴部下半の屈曲部を境として単位の異なる回転ナデを施すが、内面に関しては全体を連続的な回転ナデで仕上げる。底部外面には渦巻状に回転ナデ痕が観察でき、おそらく底部成形後に回転台もしくはロクロ上に倒置し、屈曲部下位の部分と一連で器面調整を行なっていると考えられる。

彩文についてみると、施文に先行して白色スリップを塗布する。口縁部には幅広の暗褐色帯をめぐらせるが、その施文は口縁部変形後である。肩部および胴部中位にはそれぞれ5条の平行暗褐色線をめぐらし、その間に文様帶を設ける。これらの平行暗褐色線はロクロの高速回転を利用したものではなく、回転台を用いた低速回転によって施されたためか、水平にはめぐらず乱れが顕著である。

胴部中位の主文様帶には右向きのヤギ文を連続的に描く。⑥同様に角から胴部を弧線によって描出し、それに顔・耳・肢を描き加えている。文様帶の幅が異なるためか、⑥に比して小形で、全体的にヤギ文の表現の簡略化が認められる。

(4) 小結

以上7点の観察結果を比較の視点からまとめておこう。

①～④は胴部の主文様帶に大きな丸い眼をもつ動物と、それに関係する形で樹木・植物を描くという意匠を特徴としている。動物には、コブウシ、ヤギ、ネコ科、鳥があり、樹

木・植物にはピーパル、イトスギ、まっすぐ伸びる樹木がある。①②④では動物と植物がつながれて一体のものとして表現されることは注目すべき点であり、③においても樹木と動物が意匠の上で明らかに関連するものとして表現されている点は同様である。このことは動物と植物が無関係に単なる装飾文様として描かれているのではなく、明らかに意図的・選択的な関係のもとに描写されたことを物語っている。この樹木・植物と動物の意味上の関係がクッリ式土器の特徴の第一として挙げができるであろう。

さらに動物・植物の周囲に表現される文様も、太陽形文、曲線文、魚形文、神殿文と種類が限定され、それらが厳密ではないにしても一定の規則にしたがって配されている状況を見て取ることができる。個々の文様要素がもつ意味の特定は決して容易ではないが、クッリ式土器の彩文意匠の中で何らかの意味を有しているであろうことは確かである。これらが動物と植物という主文様に関係する形で、全体の意匠が構成されているのであろう。

あくまでも一案として想像をたくましくすると、動物と植物の連関は自然世界の生命を象徴し、そこに太陽や水の象徴としての魚を組み合わせることによって、自然世界の全体を表現しようとしている可能性を指摘することができる。コブウシとヤギはインダス平原からイラン高原に共通する主要な家畜動物であるが、そこに野生動物としてのネコ科の動物が表現されることによって、人間の手が及ばない自然世界の側面をも象徴しようとしたのではないだろうか。少なくとも単に土器の器面を飾る装飾文様としてではなく、深い意味を託して描かれたのがクッリ式土器の文様であったと考えたい。

⑤は単軸イトスギ文のみを表現する例であるが、イトスギ文の描出法が②・④に共通することから、クッリ式土器に含まれるものとしてよいであろう。

こうしたクッリ式土器に比較して、⑥・⑦はクッリ式土器との関係性を示しながらも、細部の器形や製作技法の点で異なった一群である。連続して表現されるヤギ文はクッリ式土器においても副次的な文様帶に表現されるものであるが、上述の主文様帶に描かれる意匠を有さない点において、クッリ式土器とは決定的に異なる土器群と認識すべきであろう。

類似する器形を採用しながらも、その細部や製作技法に違いがみられることから、①～⑤と⑥・⑦は同時期の異なる彩文を採用した土器ではなく、異なった時期の所産であると考えたい。ヤギ文の表現の簡略化を指標にすれば、⑥・⑦のヤギ文がクッリ式土器の小形ヤギ文よりも古い段階を示している可能性が高いであろう。すなわち、相対編年の上でクッリ式土器に近いところで先行する土器群と考えておきたい。このように考えると、⑥・⑦の段階からクッリ式土器の段階への変化は断絶的に大きく、クッリ式土器の成立を考える上で一つの手掛りとなる可能性があろう。

4 クッリ式土器の意義

本章ではクッリ式土器がもつその歴史的・文化的意義について若干の考察を加えることとする。残念ながら現状ではクッリ式土器の層位的検出例が限られるため、その変遷や年代については型式学的な見地からの検討を中心とせざるを得ない部分がある。ここでは、これまであまり注目されてこなかったクッリ式土器に関する研究の重要性を強調することを目的として、断片的な資料・情報をつなぎ合わせながら、将来的なクッリ文化（土器）研究の方向性を提示することを試みたい。

ここで考察の対象とするのは、(1) クッリ式土器の成立に関わる彩文土器の系譜、(2) クッリ式土器の年代、(3) クッリ式土器のもつ要素にみられる周辺地域との関係、である。

(1) クッリ式土器の系譜

本節ではクッリ式土器がどのような過程で成立したのか考察することとする。上述のようにクッリ式土器の最大の特徴として挙げることができるのは大きな丸い眼をもつ動物表現であるが、その他の彩文要素や器形においても特徴があり、それぞれの要素がどういった系譜にあるのか正しく理解しなければ、クッリ式土器の成立あるいはその意義を考えることは困難であろう。そこで、ここではクッリ式土器にみられる器種・器形と彩文要素に大別して検討を進めていくこととする。

1) 器種・器形

オリエント美術館に所蔵されるクッリ式土器において確認できる器種としては、三葉形口縁直口鉢、方形杯、大形直口鉢、鍔付広口短頸壺、鼓形鉢がある。Stein調査時の出土資料は大部分が破片資料であるため、全体の器形が判然としないものが多いが、高杯、略円筒形の胴部から屈曲して接続する肩部をもつ壺（いわゆるcanister、以下では有肩円筒壺と仮称する）、明確な頸部をもたない大形甕、玉縁状口縁をもつ広口鉢などがある（図8）（Possehl 1986）。ナウシャロー遺跡IV期の出土資料では、玉縁口縁高杯と球胴広口短頸壺がある（図9-1～3）（Jarrige, J.-F. 1994）。必ずしも資料が多いわけではないことから、各器種の出現頻度や一時期の構成は不明であるが、総体としては上に挙げた器種がクッリ式土器に存在することは確実である。

大きな丸い眼をもつ動物表現をひとまずクッリ式土器を把握するまでの基準としたことから、当然のことであるかもしれないが、食膳具系に相当する小形の器種がほとんどみられないのは注目される。彩文帯に動物表現を中心として多様な彩文要素を配して描くことを前提とすれば、器面上に一定の面積が求められるであろうことは想像に難くなく、そもそも彩文の有無を基準として定義したクッリ式土器には小形の器種は存在し得ないのかも

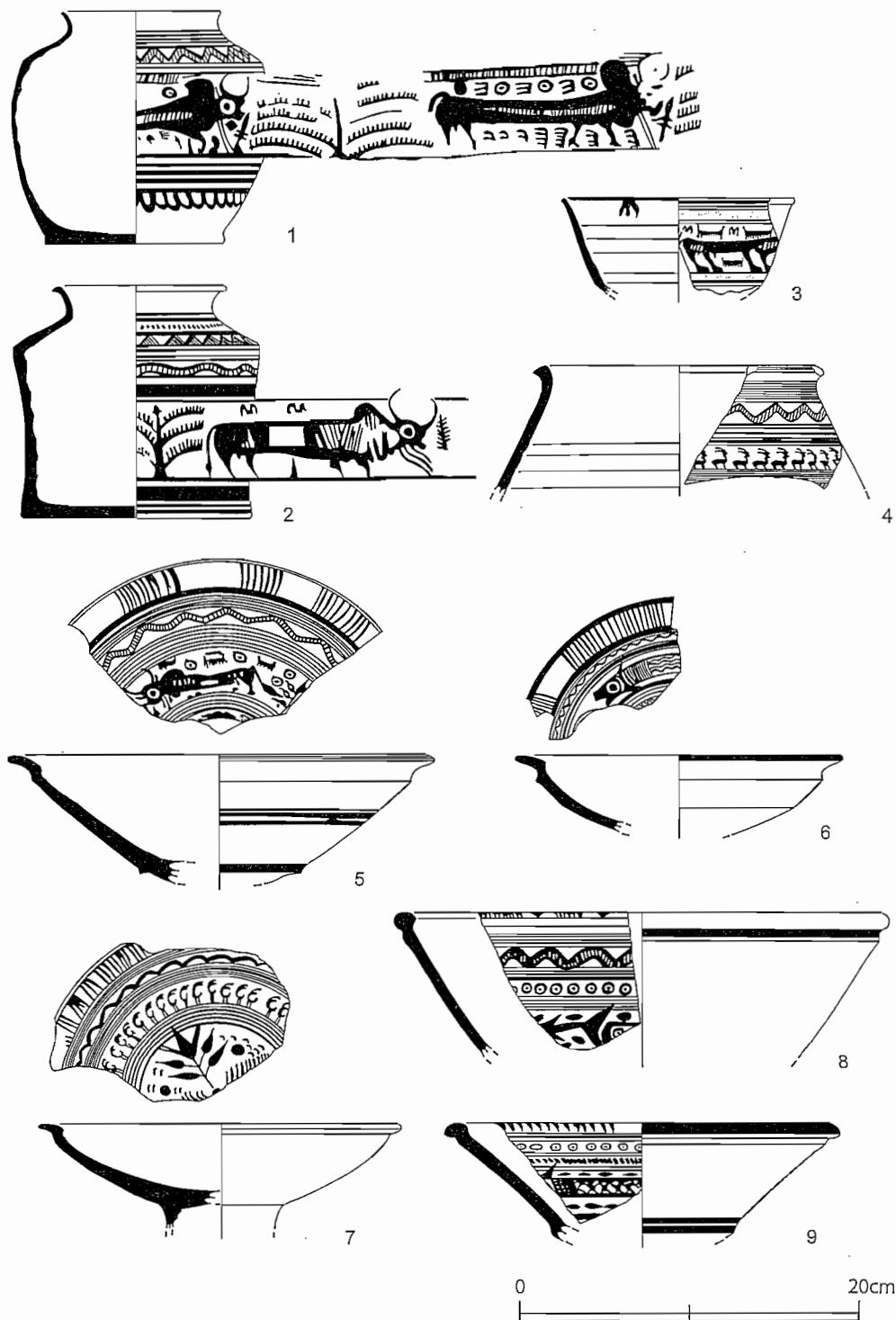


図8 クッリ遺跡およびメーヒー遺跡出土の土器 (1:4) (Possehl 1986より再トレス、一部改変)

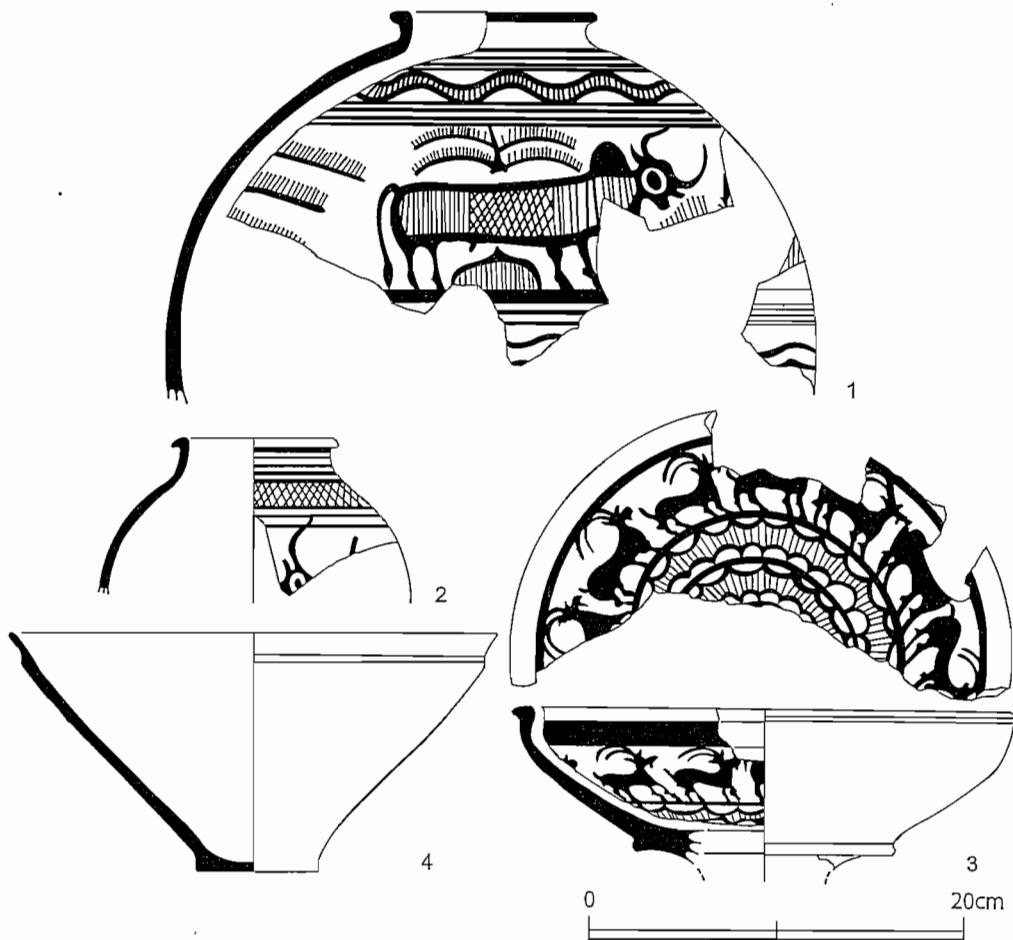


図9 ナウシャロー遺跡IV期出土の土器 (1:4) (Jarrige, J.-F. 1994より再トレース、一部改変)

しれない。メーヒー遺跡では埋葬址に関連してクリッリ式土器の出土が確認されているが、丁寧かつ密に彩文が描き込まれた土器は、本来的に日常雑器ではなく副葬品など特別な脈絡において使用される「特別な器」であった可能性も、クリッリ式土器の器種構成を考えるにあたって考慮しておく必要があろう。

各器種ごとで周辺地域の土器群との比較を試みると、オリエント美術館所蔵資料のうち、鍔付広口短頸壺は東のハラッパー式土器や先ハラッパー文化期のゴーマル (Gomal) 地方を中心とする地域の土器、あるいは同じく

先ハラッパー文化期のシンド (Sindh)・カッチー (Kachhi) 両地方に類例を見出すことができるが、その他の器種に関してはハラッパー式土器に共通するものは確認できない。大型直口鉢に関しては、その法量の差異を別にすればクリッリ式土器が分布するパローチスタン南部では前4千年紀末から前3千年紀初頭のナール式土器に、より広くみれば前4千年紀後半から前3千年紀前葉のカッチー平野を除くパローチスタン高原に広くみられた器種である点を指摘することができる。方形杯、三葉形口縁直口鉢、鼓形鉢はいずれもき

わめて特異な器形を特徴とするものであり、ハラッパー式土器や先ハラッパー文化期のバローチスターーン高原には共通する例を見出すことができないものである。クリッリ式土器特有の器種とみなすか、あるいは西のイラン高原との関わりを想定せざるを得ないが、現状での資料の乏しさゆえにその系譜を特定することは困難である。

Stein調査時の出土資料でみると、高杯および大形無頸甕はバローチスターーン高原やイラン高原ではなく、ハラッパー式土器に特徴的な器種である。玉縁状口縁広口鉢も敢言すればハラッパー式土器の爪形口縁広口鉢に類似する。有肩円筒形壺はかつてM. TosiとC. C. Lamberg-Karlovskyが指摘したように (Lamberg-Karlovsky and Tosi 1973) 、イラン南東部のバンプール (Bampur) 遺跡 (de Cardi 1970) やシャフリ・ソフタ (Shahr-i Sokhta) 遺跡 (Lamberg-Karlovsky and Tosi 1973) 、シャーハダード (Shahdad) 遺跡 (Hakemi 1997) 、同西南部のテペ・ヤヒヤー (Tepe Yahya) 遺跡 (Lamberg-Karlovsky and Potts eds. 2001) 、さらにはアラビア半島東縁部のヒーリー北 (Hili North) 遺跡A号墓 (Vogt 1985) 、ウンム・アン・ナル (Umm an-Nar) 遺跡墳墓群 (Frifelt 1991) に同様の器種を見出すことができる (図13) 。同様の器形はイラン高原に展開したクロライト製容器や沈線文を施す灰色土器にもみることができ、逆にバローチスターーン高原や東のインダス平原にはみられないことから、イラン高原の伝統的な器形であり、それがクリッリ式土器に取り込まれたものとみなしてよいであろう。Stein調査時の資料の中には同じ器形・彩文を特徴とする灰色土器が出土していることもイラン高原の灰色土器の伝統と関係するものと判断できる。

このように大まかな器種の点でみると、クリッリ式土器には東のインダス平原、西のイラン高原、そしてバローチスターーン高原の器種

が含まれていることが理解できる。ただし、器形の点でみると、必ずしも周辺地域の土器群の対応器種と相同ではない。オリエント美術館の資料でみると、クリッリ式土器の各器種に通じる器形の特徴として、胴部下半が膨らむ下膨れ形で、底部との間に屈曲部を設ける点、底部が幅の厚い輪高台状、口縁部が丸く仕上げられる点などを挙げができる。ハラッパー式土器に共通の器種がみられる鰐付広口短頸壺においてもこれらの特徴が備わっている。このことは、周辺地域からの影響を受けて共通の器種が製作されつつも、器形レベルにおいてクリッリ式土器としての独自性が存在していたことを示しているのであろう。

このほかオリエント美術館資料ではみられないもののクリッリ式土器と周辺地域との関係を示す形態要素として胴部の文様帯を区画する境界線に用いられる隆帯がある。バンプール遺跡ではすでにII期の段階から存在し、VI期にまで存続するが、器面に直線状に貼りつけたり、波状に貼りつけたりする (de Cardi 1970) 。それに彩文を組み合わせるかたちで、文様全体が構成されている。このことから隆帯文はイラン東南部で発達した施文手法と考えられるが、マクラーン地方ではミリ・カラート遺跡IIIC期～IV期において出土している (Besenval 1997, 2000) 。III C期は初期ハラッパー一段階終末期に位置づけられるが、この時期までマクラーン地方はイラン高原東南部との強い交流関係を有していたことが知られており、隆帯文という施文手法もそうしたイラン高原東南部との交流によってもたらされたものであろう。

ここで注目されるのが、愛知県陶磁資料館に保管されるクリッリ式土器および関連資料である (愛知県陶磁資料館学芸課編2004) 。2点のクリッリ式土器と2点のクリッリ式土器関連資料が紹介されているが、後者は連続小形ヤギ文のみを施す例で、オリエント美術館資料⑥・⑦に近い時期のものと考えられる。これ

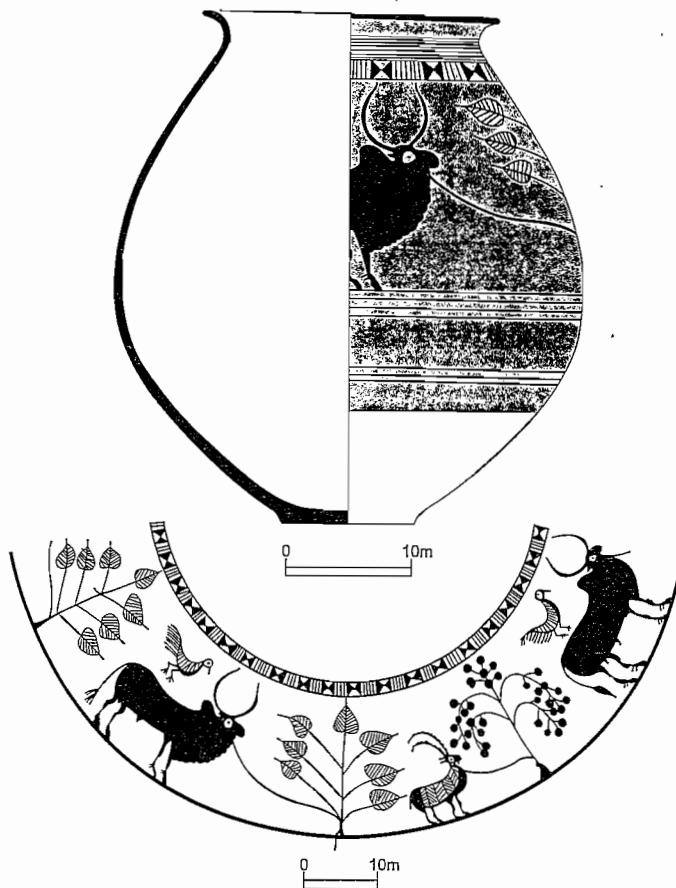


図10 ナウシャロー遺跡ⅠD期出土土器 (1:6) (Quivron 1994より再トレース、一部改変)

ら4点の資料のうち、クッリ式の動物文を施す1点の有肩広口短頸壺を除いて、いずれにも隆帶文が施されている。隆帶と平行黒線を併用するかたちで文様帯を区画し、クッリ式土器関連資料であれば連續小形ヤギ文を、クッリ式土器であれば大きな丸い眼をもつネコ科動物およびヤギをピーパルに組み合わせる形で描いている。

おそらくこうした隆帶文という装飾手法はクッリ式土器以前の時期にイラン高原東南部からバローチスタン地方南部にかけて流行した手法と考えられ、クッリ式土器が盛行するころまでにはあまり用いられなくなっていたのであろう。このことはクッリ式土器が成立する直前の時期においてイラン高原東南部

とバローチスタン南部が交流関係にあり、その交流関係を表象する要素が変容しつつも、クッリ式土器の時期にまで保持されていたことを物語っている。

2) 彩文要素

次に彩文要素についてみてみよう。先ハラッパー文化期以来、とりわけ彩文土器が数多くつくられたバローチスタン高原においては、地域の土器様式の範囲を越えて特定の彩文が広域に分布する現象がみられたが、こうした現象は彩文が地域間の交流を表象する意味を有していたことを示唆している。この点から考えれば、彩文要素には器種・器形以上に系譜性が表象されている可能性が高いと想定することができるであろう。

まず、クッリ式土器の主文様帶に描かれる動物文について考えてみよう。表現される動物には、コブウシ、ヤギ、ネコ科の動物（トラあるいはチーターか）、鳥がある。オリエント美術館資料①・④ではコブウシはその頭部前面にピーパル文あるいはイトスギ文を配し、3本の平行線によってコブウシとピーパル文・イトスギ文がつながれたかのような表現をとっている。②ではコブウシの代わりにネコ科の動物が表現されるが、その前面のイトスギ文と平行線によってつながれる点は同様である。すなわち、動物と植物が平行線によってつながれることによってセットを構成し、それが1単位として主文様帶に並列される形で表現されているのである。

このきわめて特徴的な構成はクッリ式土器に通有の特徴として認識することができるが、同様の構成がナウシャロー遺跡ID期出土の土器にも見出すことができる（図10）（Jarrige, J.-F. 1988; Quivron 1994）。大形壺の胴部に主文様帶を設け、そこにピーパルにつながれる右向きのコブウシと樹木につながれるヤギ、コブウシの背上に配される鳥を表現している。ネコ科の動物は表されないが、動物の種類および樹木との組み合わせは完全に共通している。

ナウシャロー遺跡ID期はJ.-F. Jarrigeによつてハラッパー文化直前期に位置づけられている（Jarrige, J.-F. 1993）。G. Quivronが土器の検討において明らかにしたように（Quivron 1994, 2000）、後続するII期にはハラッパー文化前期の土器が出土することから、ID期はハラッパー文化期直前から、下つてもハラッパー文化初頭には位置づけられることが確実であろう。とすれば、クッリ式土器に採用されることになる文様表現は、ハラッパー文化成立期に相前後する時期には成立していたことが明らかとなる。

さらに、構成のあり方は異なるが、コブウシと鳥、そしてナウシャロー遺跡ID期例に

はみられなかつた太陽形文の組み合わせはメヘルガル遺跡VI・VII期のいわゆるファイズ・ムハンマド式土器（Faiz Mohammad Ware）にもみることができる（Jarrige, C. et al. 1995）。ファイズ・ムハンマド式土器には動物文を含む形象文を描く一群と幾何学文を描く一群があるが、前者は大形の皿や小形の杯に描かれる。ナウシャロー遺跡ID期の資料とは、彩文が施される器種および構成の仕方において大きな差異があり、両者の間には描かれる文様の種類の共通性以上の断絶が認められるものの、系譜の上においてはつながりのある蓋然性が高い。すなわち、クッリ式土器の動物文はメヘルガル遺跡VI期以来のカッチー平原の伝統に関係していることが推測できよう。

しかし、表現される動物文の種類および構成は共通しているものの、クッリ式土器の動物文を特徴づける大きな丸い眼の表現はナウシャロー遺跡ID期の動物にはみられない。むしろ控えめに小さく表現される眼が特徴である。丸い眼の表現としてはメヘルガル遺跡VI期の例の方がクッリ式土器に近い。単なる時期の違いによる眼の表現の変化であるのか、そこに系統性があるのか判然としないが、クッリ式土器の眼の表現は際立っている。

そこで注目されるのが、インダス式印章にみられる動物表現である。既知のとおり、インダス式印章に描かれる動物意匠においてはいわゆる一角獣が全体の8割近くを占めており、インダス式印章の図像の中で中心的な位置にあるが、わずかながらに3つの頭（ウシ、一角獣、短角ウシ）をもつ動物意匠がある（図11-1）。

A. Parporaらによるインダス式印章の集成（Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991）および2000年に日本で開催された『四大文明 インダス文明展』（NHK・NHKプロモーション編 2000）に出品されたドーラヴィーラ（Dholavira）遺跡出土品

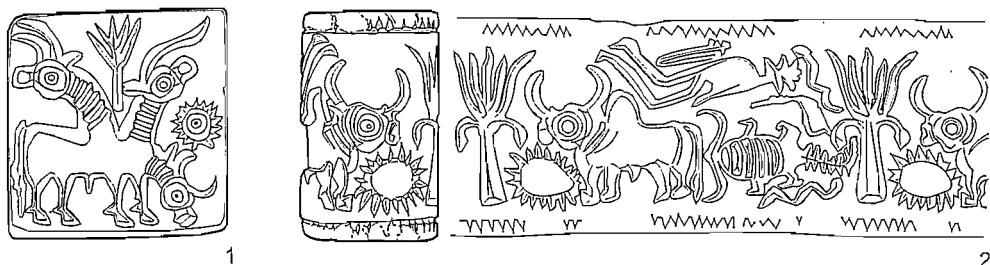


図11 クッリ式土器の動物文に類似する印章（縮尺不同）
(左：ドーラヴィーラ遺跡出土 (NHK編 2000より図化)、右：ウル遺跡出土、(Aruz 2003より図化))

を合わせると、11点が知られている。ごく少數ではあるものの、この三頭獸の表現においては顔の半分を大きな丸い眼が占めている。さらに、三頭獸の方向はクッリ式土器同様に右を向く⁷⁾。加えて、これらの三頭獸の印章の特徴として、一般的なインダス文字は表現されず、樹木形や太陽形、魚形などの文様を動物の周囲に表現するという特徴がある。こうした印章の図像表現がクッリ式土器の動物文との共通点を強く示していることは明らかであろう。それがインダス式印章の中で少数派であることも、逆にいえばクッリ式土器との関係性を物語っている。

同様の視点でみると、ウル (Ur) のラルサ期の墓の埋土から出土した円筒印章の図像も注目される (図11-2) (Gadd 1932; Mitchell 1986)。従来よりインダス文明に関係する印章として取り上げられてきたものであるが、その図像は椰子木+コブウシ+太陽形文を含み、そこにサソリとヘビ、横たわる人物が表現されている。コブウシは大きな丸い眼を特徴とする点でクッリ式土器に共通し、またサソリとヘビはイラン高原において前4千年紀以来頻繁に表現されてきた意匠である。すなわち、この円筒印章の図柄はインダス式印章よりもクッリ式土器の図像とイラン高原の図像を組み合わせた点に特徴があるとみなすことができるであろう。この円筒印章がどこで製作されたものであるのかわからないが、その図像の決定にはクッリ文化に通じる人物あ

るいは集団が関与していたことは疑い得ない。この円筒印章の年代は間接的ながらもラルサ期（前2025～前1763年）以前であることは確実である。

このようにみると、クッリ式土器の動物文はその系譜を先ハラッパー文化期のカッチー平原にもちながらも、インダス文明期のどこかの段階でインダス平原やイラン高原と関係を有していたことがわかる。すなわち、クッリ文化が展開したバローチスタン高原南部がインダス文明期において東西の地域と交流を行なっていたことが理解できよう。その意味でクッリ式土器の動物文はそうした広域の交流の中で社会・文化的表象として機能していたと考えることができる。

動物文の周囲には太陽形文、魚形文、曲線文が配されている。太陽形文はメヘルガル遺跡VI・VII期に特徴的にみられるもので、動物文との組み合わせにおいてだけでなく、幾何学文との組み合わせにおいても用いられている。三頭獸を表現するインダス式印章やウル出土の円筒印章にも表現されていることは上述のとおりである。魚形文はゴーマル地方やバンヌー (Bannu) 地方に前4千年紀後半に展開したトチ・ゴーマル式土器 (Tochi-Gomal Ware) や前3千年紀前葉のカッチー平原に消長したファイズ・ムハンマド式土器、あるいは前4千年紀後半にバローチスタン高原南部に出現したナール式土器などにおいてみられるように、バローチスタン高原に

おいて古くから好まれた意匠であり、インダス文明期においても三頭獸の変形である二頭獸を表したインダス式印章例に表現された例がある。

動物文に組み合わされる文様にはピーパル文、単軸・多枝イトスギ文がある。ピーパル文に関しては前4千年紀後半にはすでに出現し、前3千年紀前葉にはバローチスタン高原において広く表現された植物である（永嶺2000）。さらにハラッパー式土器においても多用されている。単軸イトスギ文に関しては、ナウシャロー遺跡ID期に表現例があり、さらにハラッパー文化後期の土器にも動物と組み合わせる形で表現された例がある。多枝イトスギ文についてはイラン高原東南部のバンプール遺跡において前3千年紀前葉には出現する。マクラン地方のミリ・カラート遺跡IV期出土のハラッパー式土器に例があり（Besenval 1997）、Quivronによってハラッパー文化前期に位置づけられている（Quivron 2000）。また、ナウシャロー遺跡III期が相当するハラッパー文化中期にはハラッパー式土器にも頻出するようになり、類似の構成をとる「バナナ樹文（banana leaves）」（Satyawadi 1994）も同じく高頻度で描かれるようになる。

肩部文様帶に並列して表現される小形のヤギ文に関しては、前4千年紀にバローチスタン高原に広く展開したいわゆるトガウ式文様に類似するが、トガウ式文様が前4千年紀のうちには文様の形骸化的変形が著しく本来の動物文の原型を失ってしまうところから考えて、本来的な意味におけるトガウ式文様とは別個の系譜をもつ可能性が高い⁸⁾。そこで注目されるのがイラン東南部のバンプール遺跡である（de Cardi 1970）。この遺跡ではII期には出現し、VI期にクッリ式土器に近い表現の特徴をとるようになる。

このバンプール遺跡においても、大形の連續ヤギ文から小形の連續ヤギ文への変化を看

て取ることが可能である。大形の連續ヤギ文はバンプール遺跡のみならず、シャフリ・ソフタ遺跡やウンム・アン・ナール遺跡などで主文様帶に用いられている。これらの地域ではクッリ式土器のように主文様帶に連續ヤギ文以外の動物文を描くことはなく、連續ヤギ文が主文様帶に充填される文様であったのに対し、クッリ式土器では主文様帶に連續ヤギ文以外の動物文を大きく描くという構成が採用されたために、連續ヤギ文は幅狭文様帶に副次的な文様として転用されることになったのであろう。

オリエント美術館資料⑥・⑦は並列ヤギ文のみを表現する資料であるが、上述のようにクッリ式土器とは異なる土器群である。系統の異なる同時期の土器であるのか、時期的に異なるのかが問題となるが、ヤギ文の特徴が基本的に共通していること、共通する器種・器形がみられることなどから推測すると、クッリ式土器とは異なる時期の土器である可能性が高い。とすれば、ヤギ文が小形化して副次的な文様帶へと転化される以前の土器と考えができるであろう。したがって、クッリ式土器に先行する段階にヤギ文を描く土器群が存在し、その要素をクッリ式土器が継承していると理解できる。そこにはバンプール遺跡に代表されるイラン東南部もまた関わっていると考えてよいであろう。

このようにクッリ式土器の動物文およびその周囲に表現される文様は、前4千年紀後半から前3千年紀前葉にかけてのバローチスタン高原において出現した意匠を基本として、そこにイラン高原に系譜をもつ意匠を加えて構成されていることがわかる（図12, 13）。クッリ式土器がバローチスタン高原を中心として西方の地域の彩文要素と深く関わりながら、独自の文様体系を構築していることが浮彫にされる。

オリエント美術館資料③はその中でも傑出した重要性をもつ資料である。中心に直立す

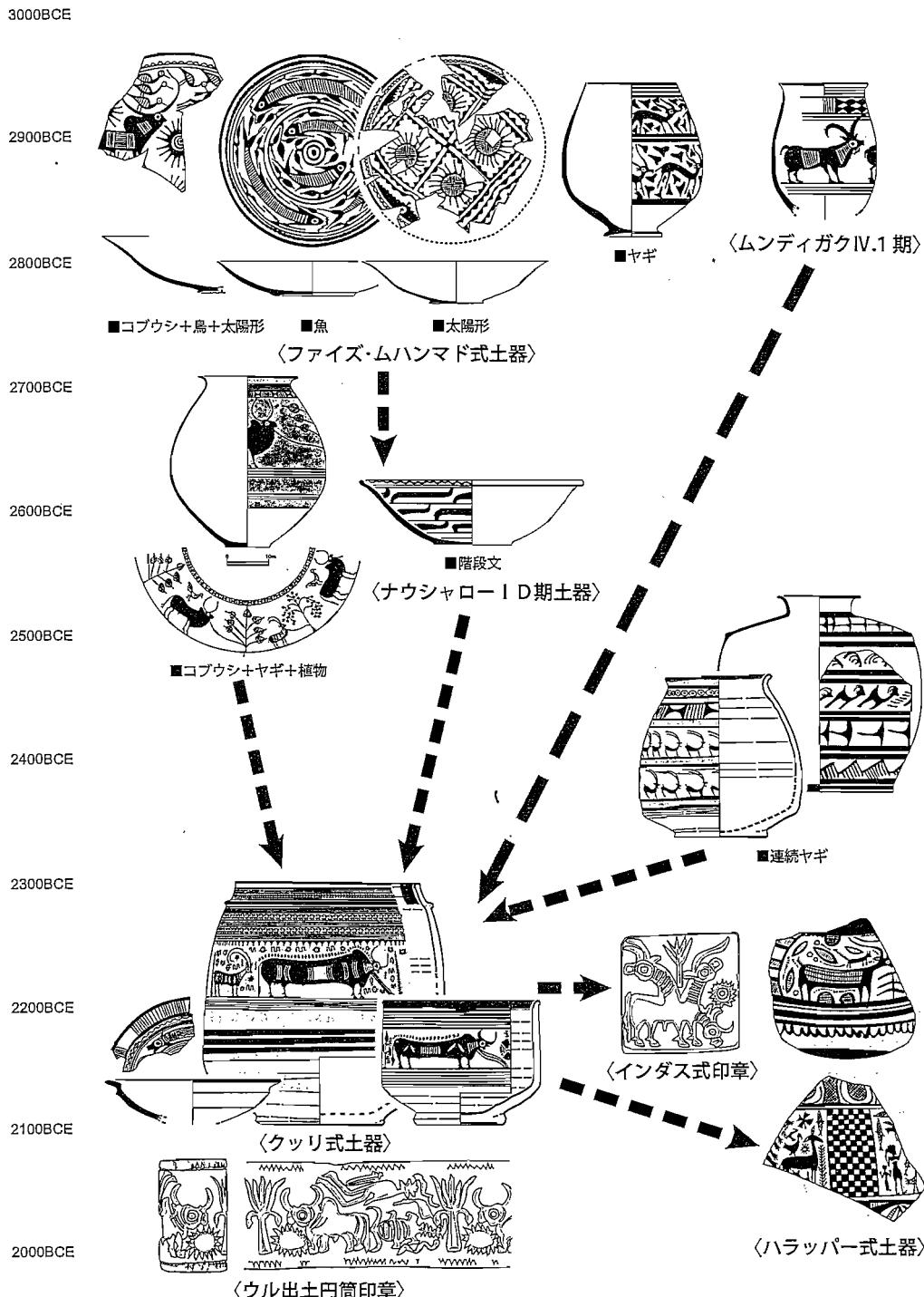


図12 クッリ式土器の系譜 (縮尺不同)

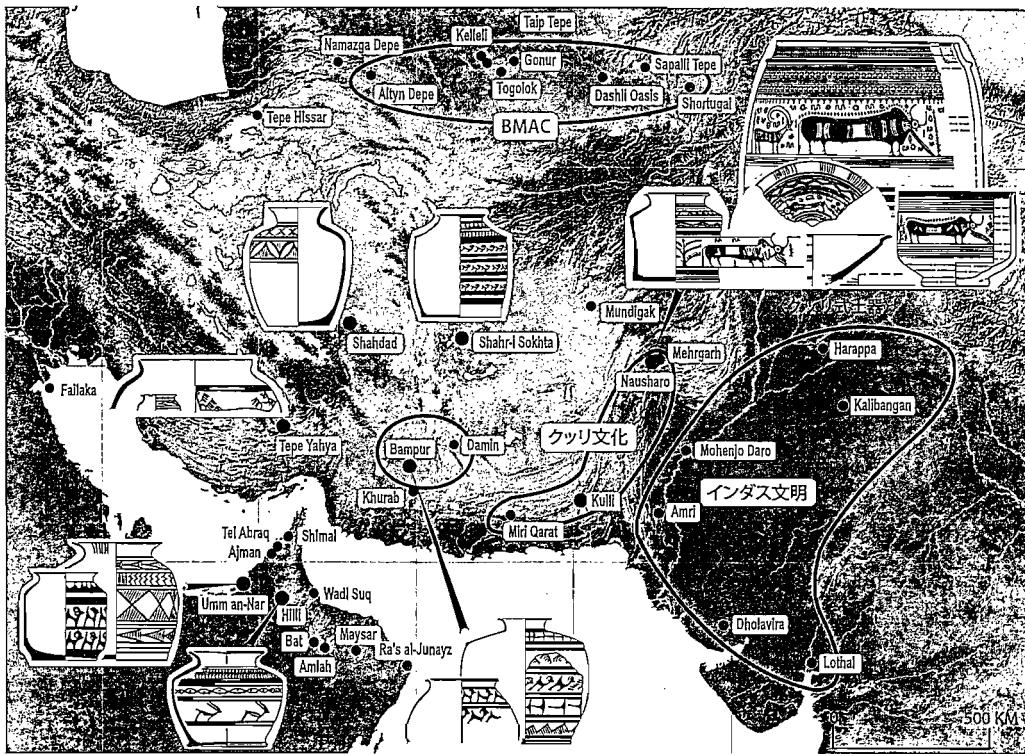


図13 有肩広口短頸壺の分布

る樹木を配し、その左右に前肢を上げて立ち上がるヤギ(またはブラックバック、アイベックス)という構成は、原エラム期やアッカド王朝期の円筒印章意匠にみられる「生命の樹」の意匠に相同である。その代表例としてルーヴル美術館およびメトロポリタン美術館所蔵の円筒印章2点を取り上げる(図14)(Harper et al. 1992; Aruz 2003)。ルーヴル美術館所蔵のスーザ(Susa)遺跡出土の印章は原エラム期の前3100～前2900年頃に位置づけられる。山岳の中央に立つ樹木の左右にヤギが大きく配され、さらにその周囲にも小さな山岳+樹木やヤギ、花などが表現されている。メトロポリタン美術館の例はアッカド王朝期のもので、前2220～前2159年頃と推定される。この例では、中央に大小3本の樹木が立ち、その左右にムフロンヒツジ(あるいはアイベックス)を載せた山岳が立ち上がる。この場面を区画するように左右に樹木が立ち、

その間にはムフロンヒツジを捕獲する人物の姿がある。オリエント美術館資料③は山岳表現を欠くものの、樹木に対して向かうヤギが表現される風景意匠の構成はこうした「生命の樹」とも呼ばれる風景意匠に則ったものと考えてよいであろう⁹⁾。

今後、同様の資料が増加することが期待されるが、①・②・④にみられる典型的なクッリ式土器の意匠構成とは異なり、より西方の影響を強く受けた意匠がクッリ式土器に表現されていることは、クッリ式土器と西方との関わりを証明する一例である。

(2) クッリ式土器の年代

以上の検討から、クッリ式土器の年代について考えることとする。年代については、古くよりハラッパー文化併行期に位置づけられてきたが、この見解は1980年代のPossehlの考察においても踏襲されている。しかし、ナ

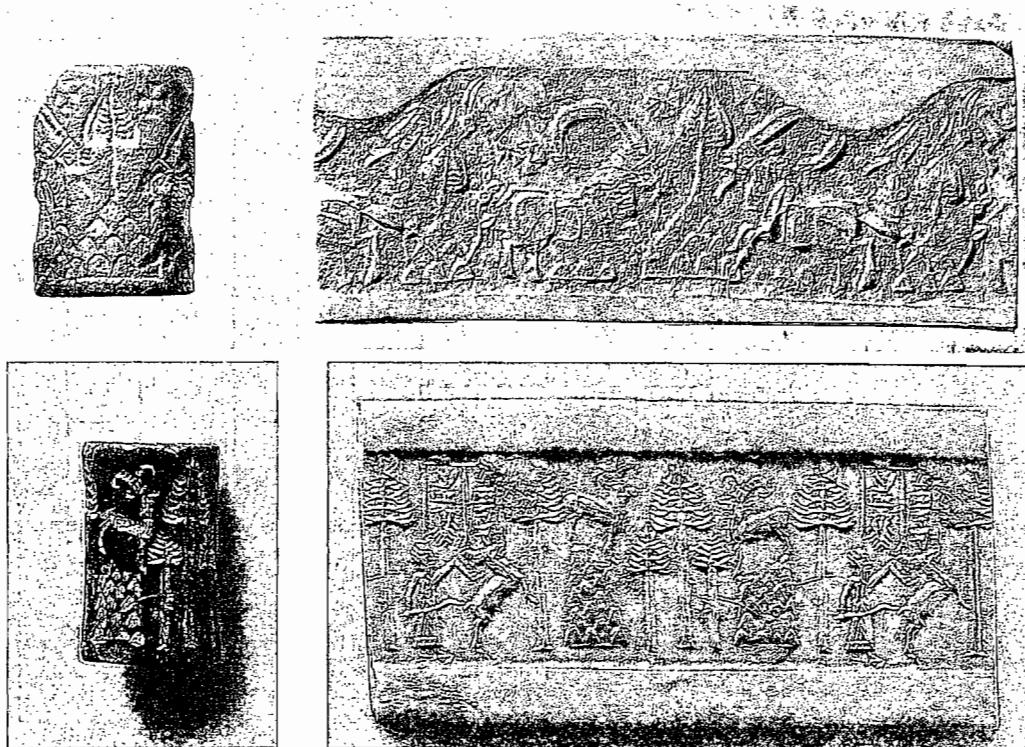


図14 「生命の樹」意匠の円筒印章
(上:スーサ遺跡出土 (Harper *et al.* 1992より)、下:メソポタミア出土 (Aruz 2003より))

ウシャロー遺跡の発掘調査によって、クッリ式土器が出土するIV期がハラッパー文化中期（III期）に後出することが明らかにされ、クッリ式土器がハラッパー文化後期に併行する可能性を考慮すべき必要性が生じている。ここではナウシャロー遺跡の調査で提起されたクッリ式土器の年代観を手掛りとして、クッリ式土器の年代について考えることとしよう。

ナウシャロー遺跡ではIII期にハラッパー文化前期の彩文が著しく変形した彩文が描かれた土器が出土しており、ハラッパー文化の中でも新しい段階に位置づけられる (Quivron 2000)。ここにモヘンジョ・ダロ (Mohenjo Daro) 遺跡やハラッパー (Harappa) 遺跡などの出土土器の大半を占める土器群をハラッパー文化の後期に位置づければ、ナウシャロー遺跡III期はハラッパー文化中期に措く

ことができるであろう¹⁰⁾。とすれば、IV期はハラッパー文化後期に併行する蓋然性が高いということになる。

加えて、ナウシャロー遺跡IV期ではBMACの土器もクッリ式土器とともに出土している¹¹⁾ (図9-4)。J.-F. JarrigeはIV期のBMAC土器をBMACの中でも古い様相を示す土器であると指摘し、BMACの文化要素のうち少なくとも土器は中央アジアの中で閉鎖的に生み出されたのではなく、その成立の過程にカッチー平原も関わっていたと論じる (Jarrige, J.-F. 1994)。BMACの年代については異論が多く、いまだ決定的な共通見解が得られていないとは言いがたい状況にあるが、前2000年を前後する時期であることは大方の研究者の一致をみているといってよいであろう (Hiebert 1994a, b; Hiebert and Lamberg-Karlovsky 1992)。この年代観に立つ限り、ナ

表1 イラン高原・バローチスタン高原・インダス平原 編年案

	テペ・ヤヒヤー	シャーハード	シャフリ・ソフタ	パンブル	シャービー・トゥンブ	ミリ・カラート	ナール	ムンティガク	メヘルガル	ナウシャロー	モヘンジョ・ダロ	ハラッパー	クツリ	
1900BCE														
2000BCE														
2100BCE	IV A期	墓地A												
2200BCE														
2300BCE			IV期	VI期										
2400BCE														
2500BCE	IV B期			V期										
2600BCE														
2700BCE		III期		IV期										
2800BCE														
2900BCE	IV C期			II期										
3000BCE					1期									
3100BCE		I期												
3200BCE														
3300BCE														
3400BCE														
3500BCE							II期	II期		I期				

*本編年表はイラン高原からインダス平原にかけての地域における遺跡間の併行関係の提示を目的としたものである。参考までに実年代を付したが、あくまでも目安程度であり、今後の調査・研究によって実年代が前後することは十分にあることを前提としている。また、各遺跡で提示されている時期の年代幅に関しては、その上限と下限は明確に特定できるわけではなく、おおむねその辺りという程度であるが、遺跡間の併行関係を持つ出土土器をもとに組み立てたとするならば、本表のような形になる。各遺跡の時期区分およびその実年代幅年に関しては、研究者間での齟齬が多く、今後の調査・研究に俟たざるを得ないところが大きいが、特徴的な出土物を鍵とした遺跡間の併行関係の把握による相対幅年の構築が依然として十分ではなく、本編年表は相対幅年を重視したものであることを銘記しておく。

ウシャロー遺跡IV期の年代は前2000年を若干さかのぼる辺りにその下限を描くことが許されるであろう。

そこでナウシャロー遺跡IV期出土のクツリ式土器をみると、公表された資料は必ずしも多くないが、大きな丸い眼を特徴とする典型的なクツリ式土器の動物文は球形の胴部を有する壺に描かれ、それに多枝イトスギ文が組み合わされている。太陽形文などの文様はみられず、オリエント美術館資料に比較すると主文様帶の文様構成は全体的に単純である。これに加えて主文様帶に大きくヤギ文を並列して表現する土器も出土している。こうした様相を示すIV期の土器群とオリエント美術館資料の型式学的あるいは時期的な関係を即断することは困難であるが、オリエント美術館の資料とは差異のあることは確かであろう。

今後の資料の増加を俟たざるを得ないものの、オリエント美術館資料をより定型化したクツリ式土器とみなしうるならば、ナウシャロー遺跡IV期のクツリ式土器は並列ヤギ文のみの土器が存在することも勘案して、クツリ式土器の中でも比較的古い様相を示している可能性を見通しとして提起することは一案である。

仮説の域を出るものではないが、ナウシャロー遺跡IV期の資料をクツリ式土器の中でも古い段階に描くならば、クツリ式土器の年代はナウシャロー遺跡IV期を大きくさかのぼらうことになる。ハラッパー文化後期の中で、BMACの年代も考慮すると、クツリ式土器の年代は前2200～前2000年、あるいはもう少し下って前1900年頃までの中で大きくずれることはないであろう。

(3) クッリ式土器を取り巻く周辺世界

すでに述べてきたように、クッリ式土器には単にバローチスタン南部のみならず、周辺世界との関係が深く投影されている。このことはクッリ文化を考える際に、周辺世界との関係、すなわち中央アジア、イラン高原、インダス平原を包括する広範な地域社会のあり方を念頭に置いておかなければならぬことを物語っている。本節ではクッリ文化を取り巻く周辺世界について若干の考察を加えることとする。

周知のとおり、前4千年紀後半にはメソポタミアを中心に都市社会が成立し、西南アジアの社会システムが大きく変容することとなつた。同じ時期にイラン高原では各地に交易・工芸品生産のセンターが形成されるが、これもまたメソポタミアでの社会の変容と連動した現象であると考えられる。イラン高原に連なるバローチスタン高原やさらにその東のインダス平原においても地域社会が形成され、相互に交流関係を築きながらネットワークを拡大していったことも一連の現象であろう。前3千年紀前葉になると、この動きはさらに強化・促進され、インダス平原においても都市社会形成への動きが顕在化していく。

前2600～前2500年頃にはインダス平原にも都市が成立する。すなわち、インダス文明の成立である。インダス文明は前4千年紀後半以降、バローチスタン高原からインダス平原の各地に成立した地域社会の間のネットワークを基盤とし、社会システムを再編する形で成立したと考えられるが、インダス文明前半期にはアフガニスタン北部のバダフシャン(Badakhshan) 地方や西のマクラーン地方にも資源開発・交易の拠点を築き、広大な地域を結びつけることになる。

インダス文明が展開した地域範囲については、この前半期の範囲に加えて、後半期を中心に関跡数が増加するガッガル・ハーカラ(Ghaggar-Hakra) 川上流域やグジャラート

(Gujarat) 地方を加えた範囲が紹介されることが多いが、インダス文明期の縦年研究がわずかながらも進展しつつある現在、インダス文明の地域範囲も必ずしも固定したものではなく、むしろその範囲が刻々と変化したであろう予測を立てる必要性が求められつつある。

いまなお調査・研究はこの地域範囲の変動を詳細に論じるところまではいたっていないが、現在公表されている資料からすると、インダス文明社会は次第にインダス平原部から東方へとその中心地を移していく可能性が大である。従来は都市衰退後のいわゆる後期ハラッパー文化期にガッガル・ハーカラ川流域やグジャラート地方での遺跡増加が指摘されてきたが、その動きはインダス文明後半期には生じていた可能性が高い。

こうした東方への中心地の移転と関係すると考えられるのがクッリ文化である。前節で見通しを述べたように、クッリ文化の年代が大まかにインダス文明後半期に位置づけられるとするならば、前半期にはマクラーン地方にまで入り込んだハラッパー文化に代わって、クッリ文化がバローチスタン地方南部からマクラーン地方に成立することになる。

そもそもマクラーン地方では前4千年紀後半から前3千年紀前葉にかけてイラン高原東南部と深く関わる地域社会・文化が成立していたことが、近年のミリ・カラート遺跡およびシャーヒー・トゥンプ遺跡の発掘調査 (Besenval 2000; Besenval *et al.* 2005) によって明らかにされているが、そこに前3千年紀中頃にハラッパー文化が伸張し、拠点を築くようになる。

この段階でマクラーン地方を舞台としてイラン高原東南部とハラッパー文化の接点が準備されることとなるが、クッリ文化はこうしたイラン高原東南部とインダス平原の間の交流を媒介としながら成立したことが土器そのものに窺うことが可能である。さらにクッリ式土器およびイラン高原東南部において共通

する器種・器形はアラビア半島においても出土しており、クッリ文化に直接的にせよ間接的にせよ関係を有した地域はペルシャ湾岸を取り巻く広大な地域範囲に及んでいたことになる。

クッリ式土器に描かれる特徴的な動物意匠がインダス式印章やメソポタミアの中核都市ウル出土の円筒印章にみられることもクッリ文化と周辺地域との積極的な交流の姿を浮彫にする。Possehlはクッリ文化をインダス文明社会の一部として捉えて評価を行なったが、クッリ文化の意義はインダス文明のみならず、周辺地域と積極的に交流を行ない、西南アジア各地を結びつけた点に求められるべきであろう。

こうしたクッリ文化の国際性という点で看過し得ないのは、同じく前3千年紀後葉に中央アジア南部に展開したBMACとの関係である。BMACがもつ広域性はかねてより注目され、インド・イラン語族やインド・アーリア語族の移動とも関連させて評価が進められてきたが(Sarianidi 1993, 1994; Hiebert and Lamberg-Karlovsky 1992; Parpola 1993)、クッリ文化とおおむね同時期の文化現象であるとともにクッリ文化が展開したバローチスタン高原南部からカッチー平原においてもBMAC系の器物が報告されていることは熟考する必要がある。カッチー平原ではメヘルガル遺跡VIII期に描かれるシブリ(Sibri)遺跡(Santoni 1984; Jarrige, C. et al. 1995)、クエッタ・ホード(Quetta Hoard)(Jarrige, J.-F. and Hassan 1989)、バローチスタン南部ではメーヒー遺跡(Stein 1931; Possehl 1986)の出土資料がある。土器のほかに石製コラムや石製円盤、組み合わせ式女性像、BMAC式印章などが出土しており、BMACに深く関与する人物あるいは集団の移動または移住を物語っているが、それらがクッリ文化とも接点を有していたことは必ずしも十分に説明されているとはいがたい。

クッリ文化がイラン高原東南部からバローチスタン高原南半部、ペルシャ湾岸に広大な交流ネットワークを築く一方で、BMACは中央アジア南部からイラン高原北半部に同様の広域ネットワークを形成し、両者のネットワークが接点を有していたことは前3千年紀後葉の西南アジア世界の構造・特質を考える上できわめて重要である。イラン高原を舞台としたネットワークは前4千年紀より形成されてきたが、西にメソポタミア文明が、東にインダス文明が興隆する前3千年紀中葉には、少なくとも見かけ上はその重要性を減じたかにみえたイラン高原が再び各地を結びつける回廊として頗在化してくる状況をBMACおよびクッリ文化の展開にみることができるであろう。それはすなわち西南アジア世界の交流ネットワークの再編である。

こうした西南アジア世界の交流ネットワークの再編は周辺地域においても大きな影響を及ぼしたと考えられる。メソポタミアにおいてはアッカド王朝の成立やイラン高原への軍事遠征、あるいはイラン高原からメソポタミア平原へのイラン系集団の侵入などが挙げられようが、インダス文明にとってはその影響はより大きかった可能性が高い。というのも、インダス文明社会は前3千年紀前葉までのイラン高原からバローチスタン高原、さらにはインダス平原にまで及ぶ交流ネットワークを基盤として社会を再編する形で成立したがゆえに、イラン高原やその西のメソポタミアあるいはペルシャ湾岸との関係はきわめて重要な要素であったと考えられる。アフガニスタン北部のラピス・ラズリ原産地であるバダフシャン地方や西のマクラーン地方を抑えたことは、西方との関係の上でインダス文明社会にとっては戦略的に著しく重要であったであろう。

しかし、インダス文明後半期にはバローチスタン高原にクッリ文化が成立し、イラン高原や中央アジア、ペルシャ湾岸との広域関

係性を築くようになると、インダス文明社会としても西方のつながりを維持するために、西方との交流のあり方を再編する必要に迫られたであろう。即断はできないものの、解釈の一案として指摘できるのは海上交易の活発化である。アッカド王朝のサルゴン王の時代にはメソポタミア東方のメルッハ(Meluhha)からの船舶がメソポタミアに来航していたことが記録されており(クレンゲル1983)、それ以前にも海上交通が利用されていた可能性は否定できないものの、前3千年紀後葉にいたって陸上交通がイラン高原を中心とする集団によって掌握されるようになると、インダス文明社会にとってはますます海上交通の重要性が増大することになったと考えられる。結果として、西方への輸出品の原産地に近いグジャラート地方が重視されるようになり、遺跡数が増加することになったのではないだろうか。

断片的な資料ながら、モヘンジョ・ダロ遺跡(Marshall 1931; Mackay 1938)、ハラッパー遺跡(Vats 1940)、チャヌフ・ダロ(Chanh Daro)遺跡(Mackay 1943)およびアムリー(Amri)遺跡(Casal 1964)の出土土器の中には、クッリ式土器の文様構成に類似する彩文を描いた土器が知られている。樹木と動物、鳥を組み合わせたもので、インダス文明前期や中期にはみられなかつたものである。インダス式印章にクッリ式土器の動物文に類似する表現をとる例が存在することはすでに指摘したとおりであるが、クッリ文化の西方との交流の上で的重要性が増大するにつれ、インダス平原部にもその影響が及んで顕在化するようになったことを示すものであろう。

モヘンジョ・ダロ遺跡では後期の段階になって大区画の建物が廃絶して小形の部屋空間を連接させた建物が増加することが明らかにされているが、こうした現象は少なくともシンド地方においては従来の文明社会の拠点であった都市の変容が進行していたことを物語

っている。モヘンジョ・ダロ遺跡は前3千年紀前葉までにカッチー平原が有していたパローチスター高原からイラン高原への入口としての機能を東に移転させる形で成立した都市である可能性が考えられるが、パローチスター高原がクッリ文化によって掌握されたインダス文明後期にはその本来の機能を果たせなくなっていた可能性が高い。すなわち、インダス文明後期には前半期とは根本的に異なる交流ネットワークの様態が現出し、結果としてインダス文明社会もまた変容を余儀なくされたのではないであろうか。東方において遺跡数が増加する現象はこうした文明社会の変容と切り離して考えることはできないであろう。

以上述べてきたように、インダス文明後期、すなわち前3千年紀後葉にはイラン高原から中央アジアで生じた社会の再編に伴って、前3千年紀中葉の交流ネットワークあるいはその中で一定の役割を担った地域社会の様態が大きく変容することになったと考えられる。クッリ文化はまさにそうした交流ネットワークの再編の中で成立し、新たなネットワークの中で重要な役割を果たした文化ということができる。その詳細の解明は今後の資料の増加に委ねざるを得ないものの、従来の西南アジアの文明社会像を大きく塗り替える可能性を潜在的に有するものとして積極的に研究を進めていく必要があることだけは確かであろう。

5 おわりに

本稿では、近年骨董品市場への流出品という形で増加するクッリ式土器を取り上げ、そこに垣間見える歴史的意義について仮説を重ねつつ素描を試みてきた。繰り返し述べてきたように、層位的な発掘調査の成果に基づく情報は今なお限定されており、今後の調査・研究に俟たざるを得ないところが多いが、従

来あまり取り上げられることのなかつたクッリ式土器あるいはクッリ文化を積極的に時間・空間軸上に位置づけることによって、クッリ文化のみならず周辺地域との関係の中で前3千年紀後葉の西南アジア世界の歴史像を今一度再考する必要性を喚起するにいたつた。

殊にクッリ文化が深い関係をもつたインダス文明は発掘調査による情報が必ずしも多くないためか、固定的な社会像が描かれる傾向にあった。十分な検討を得ないままに最大公約数的にインダス文明社会の地域範囲の広大さだけが強調されてきたが、クッリ文化を評価することによって、インダス文明社会の盛衰の過程およびその要因の一端を理解することが可能になると考える。

また、前2千年紀の西南アジア世界を特徴づけるインド・ヨーロッパ語族の移住の問題に関しても、それに先行する前3千年紀の西南アジア世界の変転を明らかにすることによって、ある程度その道筋を見出すことができるであろう¹²⁾。

巨視的にみれば、前3千年紀の西南アジアの文明社会は決して静的・固定的なものではなく、きわめて流動的に変容を繰り返したと考えるべきである。その中で現在の地域区分に捉われた理解では、文明社会のダイナミズムを十分に把握することすら難しいであろう。ここで述べた諸点は今後の研究課題であることはいうまでもないが、クッリ文化の問題は今一度文明社会の歴史像あるいは特質を考え直していく上での手掛りとなるであろうことは確実である。

以上、オリエント美術館収蔵品の紹介を中心に、クッリ文化の意義と役割について検討してきた。本文中にも触れたように、資料的制約が多く、展開した議論は多くの部分でお仮説の域を出るものではない。しかしながら、今回の作業がインダス文明を含む西南アジアの文明社会の理解に対し、今後の研究の方向性を提起したものと確信して擱筆する

こととする。

本稿は岡山市立オリエント美術館に収蔵されるクッリ式土器および関連資料について、近藤、上杉、小茄子川が調査の機会を同美術館より与えられ、三者による検討をもとに上杉が文章をまとめた。掲載した挿図に関しては上杉・小茄子川が東海大学3年生の木村聰の補助を得て作成した。なお、資料調査にあたっては、岡山市立オリエント美術館館長・谷一尚氏および同美術館学芸員・四角隆二、須藤寛史両氏より格別のご高配を得た。銘記して深謝申し上げます。

【註】

- 1) 「インダス文明」と「ハラッパー文化」の名称の違いについて、若干の説明をしておきたい。当初、インダス平原部においてモヘンジョ・ダロ遺跡とハラッパー遺跡が発見され、「インダス文明」という名称が与えられたが、その後の調査で「インダス文明」に属するとされる遺跡がインダス平原部のみならず、その周辺部においても次々と発見され、当初の意図とは異なる形で「インダス文明」の範囲が確定されるようになってきた経緯がある。インダス平原部という地理的単位に基づく狭義の「インダス文明」に対してインダス平原を中心とする地域を包摂する名称として「大インダス文明(Greater Indus Civilization)」という名称が用いられたり、ハラッパー遺跡の名称を探って「ハラッパー文明」という呼び方がされたりするが、筆者らの見解としては「インダス文明」社会はさまざまな地域に展開した先ハラッパー文化群を主たる基盤とし、その地域社会・文化群の間の関係を再編する形で成立しているとの認識である。「ハラッパー文化」は「インダス文明」社会を構成する主たる要素であるが、「ハラッパー文化」=「インダス文明」ではない。というのも「インダス文明」社会は時期ごとにその中心地域を移転しつつ、地域間関係を再編しながら展開し、その結果として現出する物質文化の内容も必ずしも一様ではないと考えるためである。とはいものの、クッリ文化に象徴的に示されるように、インダス文明の範囲を明確に確定することは困難である。確かに「ハラッパー文化」の標識的な遺物の分布によってインダス文明社会が影響力を及ぼした範囲を示すことはできるが、とりわけその縁辺部においては周辺隣接地域との交渉関係があり、現在の国境によって画定された近代・現代国家群と同じ意味でその境界を截然と定めることは実質不可能であり、意味のあることではない。クッリ文化は「インダス文明」とも西方世界とも交渉関係をもちつつ展開した文化であり、「インダス文明」との関係において

- のみその意義を問うことは、クリ文化の果たした役割を矮小化することにつながるであろう。その意味で「インダス文明」という用語はきわめて漠然とした定義となるが、「インダス文明」社会が作り出した社会システムが影響を及ぼした範囲と理解しておく。一方、「ハラッパー文化」はある程度考古学的にその内容を定義しうる概念であるが、これとても縁辺部では周辺隣接地域との交渉関係によって境界が曖昧化する場合がある。
- 2) 遺構に用いられている石材について、Steinは遺跡の近傍で採取できるものではないことに注目している。
 - 3) Steinの報告によると、磨石・石皿以外には石器は出土していないとのことであり、Stein自身もその要因を判断しかねている。
 - 4) クリ遺跡およびメーヒー遺跡から出土した女性土偶については、ナウシャロー遺跡の出土資料を中心にC. Jarrigeが論じている (Jarrige, C. 1997)。クリ式土偶を特徴づけるのは、脚をもたない自立式構造を有する下半身の形態 (pawn figurine) であるが、ナウシャロー遺跡ID期には同様の下半身の形態をもつ一群が出土している。頭部の表現は初期ハラッパー文化期終末期の特徴をもつものであって、クリ式土偶の出現に古くさかのればナウシャロー遺跡ID期の資料が関係していることが推測できる。この点は土器の意匠においても同様であり、クリ文化を特徴づける要素の一部がナウシャロー遺跡ID期以降のパローチスタン高原に求めうることを明確に物語っている。
 - 5) エディト・シャハル・コンプレックスはペーラーの北の山間地帯へと移行する狭隘な渓谷地帯に分布する500ヶ所以上の石積遺構からなる遺跡群で、Fairervisはニアイ・ブーティ遺跡I期に併行するコンプレックスAと前2千年紀に位置づけられるコンプレックスBに分類し、遺跡の特徴について概観している。ちなみにエディト・シャハルは遺跡群のうちの一つの遺跡名である。
 - 6) 何をもってクリ式土器として理解するかという点については、研究者間で必ずしも一致をみていないのが現状である。Steinの調査によってクリ遺跡およびメーヒー遺跡から出土した土器にもさまざまな文様のヴァリエーションがあり、それらを一括してクリ式土器とするのか、あるいはそれらのヴァリエーションが異なる時期の土器群が遺跡形成過程において混在したか、あるいは同時期の異系統土器群が一遺跡内で共存した結果とみなして、クリ式土器という名称をより限定的に用いるべきかという論点に分かれる。筆者らの見解は大きな眼をもつ動物文がその他の文様と組み合わさせて特有の文様構成または意匠を構成するという点から、クリ式土器とはこれら特有の文様によって弁別されるべきものと考える。
 - 7) 印章を封泥に押捺するものとみなす前提に立てば、押捺された時には図柄・文字は反転することはいうまでもない。仮にクリ式土器の動物文に類似する表現をもつ印章を押捺すると動物は左を向くことになり、結果としてクリ式土器の動物文とは異なる方向を向くことになる。しかし、ここで注意しておきたいのは、殊にインダス式印章に限ったときにはそれが粘土に押捺することを前提とした器物であったかどうかという点である。確かにインダス式印章を粘土に押捺して封泥とした例は知られているが、印章の数に比して圧倒的に限られている。こうした点から考えた時、インダス式印章は、時に封泥として用いられることがあったとしても、むしろ現代でいうところの身分証明証に近いものであったのではないだろうか。何ら断定しうる証拠があるわけではないが、この立場に立てば、クリ式土器の動物文に類似する動物表現をもつ印章はクリ式土器と同じ方向を向くことになり、それは左向きの動物文を表現する典型的なインダス式印章とは明らかに異なっていることになる。
 - 8) ヤギあるいはアイベックスなど、角をもった動物は前5千年紀よりイラン高原で土器彩文のうちに意匠化され、前4千年紀前半までにはパローチスタン地方でも流行することとなった。パローチスタン地方北部のゴーマル平野やパンヌー盆地に展開したシェーリ・ハーン・タラカイ式土器やパローチスタン地方南部を中心に展開したトガウ式動物文がそれである。原則的にヤギあるいはアイベックスは横向きに連続的に表現される。パローチスタン地方南部のトガウ式動物文においては動物文が本来の形態を失っていくが、イラン高原ではシャフリ・ソフタ遺跡の資料などをみると、ある程度動物の形態を保持した形で前3千年紀前葉までは続くようである。本稿で取り上げた連続ヤギ文はそうしたイラン高原の中で温存されたヤギあるいはアイベックスといった動物文の伝統を引くものと考えられ、パローチスタン地方南部で展開したトガウ式文様とは系譜を違えるものであろう。
 - 9) ペルシャ湾岸を中心に分布するディルムン式印章においても、椰子木を中心としてその左右にガゼルが対向して表現される例が知られている (Højlund and Anderson ed. 1994; 329)。また、構成は異なるが、ガゼルに単軸イトスギ文を組み合わせる例もあり (Højlund and Anderson ed. 1994; 331)、大きく丸い眼をもつ表現とともにクリ式土器との関係を示唆している。また、その年代に関しても前2000年を前後とする点もクリ文化との関係を考える上で重要である。
 - 10) J.-F. Jarrigeは自身が指揮するナウシャロー遺跡の発掘調査の成果に、アムリー遺跡やモヘンジョ・ダロ遺跡の成果を加えて、ナウシャロー遺跡II期をハラッパー文化前期 (=アムリー遺跡III期、モヘンジョ・ダロ遺跡下層)、III期をハラッパー文化中期 (=アムリー遺跡III期、モヘンジョ・ダロ遺跡中層)、IV期をハラッパー文化後期 (=アムリー遺跡III期、モヘンジョ・ダロ遺跡上層) とする (Jarrige, J.-F 1994)。本稿でも、基本的にJarrigeの見解を踏襲し、ハラッパー文化、ひいてはインダス文明を前・中・後期の3時期に大別する。
 - 11) ただし、厳密にはIV期の中でもクリ式土器はBMAC系土器が出土する層よりも下位より出土していることが

- 報告されている (Jarrige, J.-F. 1994)。ごく近接した時間軸上の位置を両者がそれぞれ占めていると考えられるが、仮にナウシャロー遺跡IV期のクッリ式土器を、クッリ式土器全体の中で古い段階に位置づけるならばクッリ式土器全体の年代はナウシャロー遺跡IV期の時間幅におおむね併行すると考えることができるであろう。
- 12) J.-F. JarrigeはBMACを中央アジアにのみ起源を有するという一般的理解に対して疑義を呈し、BMAC系の器物の広域分布に関して、BMACとインド・アーリア語族を同一視することに否定的見解を示している。Jarrigeの見解によれば、前3千年紀末に中央アジアからイラン高原、インダス平原にかけて、社会の再編が進行し、その中でBMACが出現したとする。あくまでもBMACはそうした広域に及ぶ社会システムの再編を示す一現象とする立場である。筆者らの見解もJarrigeに近く、前3千年紀末の社会再編の一端にBMACのみならずクッリ文化も関与していたと考える。おそらく社会再編はイラン高原を中心軸の一つとして展開したと考えるが、地域間交流のネットワークによって結びつけられた周辺世界は、連鎖的に再編の余波を受けることになったと推測する。

【引用・参照文献】

- Aruz, J. ed. 2003 *Art of the First Cities The Third Millennium B.C. from the Mediterranean to the Indus*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Besenval, R. 1992 Recent Archaeological Surveys in Pakistani Makran. In *South Asian Archaeology 1989*, 25-35. Madison, Prehistory Press.
- Besenval, R. 1994 The 1992-1993 Field-seasons at Miri Qalat: New Contributions to the Chronology of Protohistoric Settlement in Pakistani Makran. In *South Asian Archaeology 1993*, 81-92. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Besenval, R. 1997 The Chronology of Ancient Occupation in Makran: Results of the 1994 Season at Miri Qalat, Pakistan Makran. In *South Asian Archaeology 1995*, 199-216. Cambridge, The Ancient India and Iran Trust.
- Besenval, R. 2000 New Data for the Chronology of the Protohistory of Kech-Makran (Pakistan) from Miri Qalat 1996 and Shahi-Tump 1997 Field-Seasons. In *South Asian Archaeology 1997*, 161-187. Rome, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente.
- Besenval, R. 2005 Chronology of Protohistoric Kech-Makran. In *South Asian Archaeology 2001*, 1-9. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
- Besenval, R. and P. Marquis 1993 Excavations in Miri Qalat (Pakistani Makran)- Results of the First Field-Season (1990). In *South Asian Archaeology 1991*, 31-48. Stuttgart, Franz Steiner Verlag.
- Besenval, R., V. Marcon, C. Buquet and B. Mutin 2005 Shahi-Tump: Results of the Last Field-Seasons (2001-2003). In *South Asian Archaeology 2003*, 49-56. Aachen, Linden Soft Verlag e.K.
- Casal, J.-M. 1961 *Fouilles de Mundigak*. Paris, Librairie C. Klincksieck.
- Casal, J.-M. 1964 *Fouilles D'Amri*. Paris, Librairie C. Klincksieck.
- Casal, J.-M. 1966 Nindowari: A Chalcolithic Site in South Baluchistan. *Pakistan Archaeology* 3: 10-21.
- de Cardi, B. 1964 British Expedition to Kalat, 1948 and 1957. *Pakistan Archaeology* 1: 20-29.
- de Cardi, B. 1965 Excavations and Reconnaissance in Kalat, West Pakistan: The Prehistoric Sequence in the Surab Region. *Pakistan Archaeology* 2: 86-182.
- de Cardi, B. 1970 Excavations at Bampur: a third millennium settlement in Persian Baluchistan 1966. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 51 (3): 233-355. New York, The American Museum of Natural History.
- de Cardi, B. 1983 *Archaeological Surveys in Baluchistan, 1948 and 1957*. Occasional Publication No.8. London, Institute of Archaeology.
- Dales, G. F. and J. M. Kenoyer 1986 *Excavations at Mohenjo Daro, Pakistan: The Pottery*. University Museum Monograph 53, Philadelphia, The University Museum, University of Pennsylvania.
- Fairservis, W. A. Jr. 1971 *The Roots of Ancient India*. New York, Macmillan.
- Franke-Vogt, U. 2005 Excavations at Sohr Damb/Nal: Results of the 2002 and 2004 Seasons. In *South Asian Archaeology 2003*, 63-76. Aachen, Linden Soft Verlag e.K.
- Franke-Vogt, U. and A. Ibrahim 2005 A New Perspective of an Old Site: Reopening Excavations at Sohr Damb/Nal (Balochistan). In *South Asian Archaeology 2001*, 105-115. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
- Frifelt, K. 1991 *Third Millennium Graves: The Island of Umm an-Nar 1*. Jutland Archaeological Society Publications 26-1, Højbjerg.
- Gadd, C. J. 1932 Seals of Ancient Indian Style Found at Ur. *Proceedings of the British Academy* 18: 191-210.
- Hakemi, A. 1997 *Shabdad: Archaeological Excavations of a Bronze Age Center in Iran*. Rome, IsMEO.
- Harper, P. O., J. Aruz and F. Tallon eds. 1992 *The Royal City of Susa: Ancient Near Eastern Treasures in the Louvre*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Hiebert, F. T. 1994a *Origins of the Bronze Age Oasis Civilization in Central Asia*. American School of

- Prehistoric Research Bulletin 42, Cambridge, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- Hiebert, F. T. 1994b Production Evidence for the Origins of the Oxus Civilization. *Antiquity* 68 (259): 372-387.
- Hiebert, F. T. and C. C. Lamberg-Karlovsky 1992 Central Asia and the Indo-Iranian Borderlands. *Iran XXX*: 1-15.
- Højrup, F. and H. Andersen ed. 1994 *Qala'at al-Bahrain vol.1: The Northern City Wall and the Islamic Fortress*. Jutland Archaeological Society Publications XXX: 1. Aarhus, Jutland Archaeological Society/Aarhus University Press.
- Jarrige, C. 1984 Terracotta Human Figurines from Nindowari. In *South Asian Archaeology 1981*, 129-134. Cambridge, Cambridge University Press.
- Jarrige, C. 1997 The Figurines From Nausharo Period I and Their Further Developments. In *South Asian Archaeology 1995*, 33-43. Cambridge, The Ancient India and Iran Trust.
- Jarrige, C., J.-F. Jarrige, R. H. Meadow and G. Quivron 1995 *Mehrgarh: Field Reports 1974-1985 From Neolithic Times to the Indus Civilization*. Karachi, The Department of Culture and Tourism, Government of Sindh, Pakistan.
- Jarrige, J.-F. 1988 Excavations at Nausharo. *Pakistan Archaeology* 23: 149-203.
- Jarrige, J.-F. 1990 Excavations at Nausharo; 1988-89. *Pakistan Archaeology* 25: 193-240.
- Jarrige, J.-F. 1993 The Question of the Beginning of the Mature Harappan Civilization as Seen from Nausharo Excavations. In *South Asian Archaeology 1991*, 149-164. Stuttgart, Franz Steiner Verlag.
- Jarrige, J.-F. 1994 The Final Phase of the Indus Occupation at Nausharo and its Connection with the Following Cultural Complex of Mehrgarh VIII. In *South Asian Archaeology 1993*, 295-313. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Jarrige, J.-F. 1997 From Nausharo to Pirak: Continuity and Change in the Kachi/Bolan Region from the 3rd to the 2nd Millennium B.C. In *South Asian Archaeology 1995*, 11-32. Cambridge, The Ancient India and Iran Trust.
- Jarrige, J.-F. and M. Usman Hassan 1989 Funerary Complexes in Baluchistan at the End of the Third Millennium in the Light of Recent Discoveries at Mehrgarh and Quetta. In *South Asian Archaeology 1985*, 150-166. London/Riverdale, Curzon Press/The Riverdale Company.
- Joshi, J. P. and A. Parpola 1987 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions 1. Collections in India*. Memoirs of the Archaeological Survey of India No.86. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Kjærum, P. 1986 The Dilmun Seals as Evidence of Long Distance Relations in the Early Second Millennium B.C. In *Bahrain through the Ages: the Archaeology*, 269-277. London, The Ministry of Information, State of Bahrain.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. and M. Tosi 1973 Shahr-i Sokhta and Tepe Yahya: Tracks on the Earliest History of the Iranian Plateau. *East and West* 23 (1-2): 21-57.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. and D. T. Potts ed. 2001 *Excavations at Tepe Yahya, Iran 1967-1975: The Third Millennium*. Cambridge, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- Mackay, E. J. H. 1938 *Further Excavations at Mohenjo-daro, vols. I and II*. Delhi.
- Mackay, E. J. H. 1943 *Chanhudaro Excavations 1935-36*. Boston, American Oriental Society.
- Marshall, J. H. 1931 *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. London, Arthur Probsthain.
- Mitchell, T. C. 1986 Indus and Gulf Type Seals from Ur. In *Bahrain through the Ages: the Archaeology*, 278-285. London, The Ministry of Information, State of Bahrain.
- Parpola, A. 1993 Margiana and the Aryan Problem. *International Association for the Study of the Cultures of Central Asia, Information Bulletin* 19: 41-62.
- Piggott, S. 1950 *Prehistoric India to 1000 B.C.* London, Penguin Books.
- Possehl, G. L. 1986 *Kulli: An Exploration of Ancient Civilization in Asia*. Durham, Carolina Academic Press.
- Quivron, G. 1994 The Pottery Sequence from 2700 to 2400 BC at Nausharo, Baluchistan. In *South Asian Archaeology 1993*, 629-644. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Quivron, G. 2000 The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50 (1-4): 147-190.
- Santoni, M. 1984 Sibri and the South Cemetery of Mehrgarh: Third Millennium Connections between the Northern Kachi Plain (Pakistan) and Central Asia. In *South Asian Archaeology 1981*, 51-60. Cambridge, Cambridge University Press.
- Sarianidi, V. 1993 Recent Archaeological Discoveries and the Aryan Problem. In *South Asian Archaeology 1991*, 251-263. Stuttgart, Franz Steiner Verlag.
- Sarianidi, V. I. 1994 Margiana and the Indo-Iranian world. In *South Asian Archaeology 1993*, 667-680. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.

- Satyawadi, S. 1994 *Proto-Historic Pottery of Indus Valley Civilisation*. New Delhi, D.K.Printworld (P) Ltd.
- Shah, S. G. M. and A. Parpola 1991 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions 2. Collections in Pakistan*. Memoirs of the Department of Archaeology and Museums, Government of Pakistan Vol.5. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Stein, M. A. 1931 *An Archaeological Tour of Gedrosia*. Memoirs of the Archaeological Survey of India, vol. 43. Calcutta, Government of India.
- Vats, M. S. 1940 *Excavations at Harappa*. Delhi, Government of India Press.
- Vogt, B. 1985 The Umm an-Nar Tomb A at Hili North: a Preliminary Report on Three Seasons of Excavation, 1982-1984. *Archaeology in the United Arab Emirates* 4: 20-37.
- 愛知県陶磁資料館学芸課編2004「土と炎の芸術—世界の土器ー」愛知県陶磁資料館。
- クレンゲル、ホルスト(江上波夫・五味 亨訳) 1983 「古代オリエント商人の世界」山川出版社。
- 小磯 学 2005 「インダス文明の交易活動における印章」『西アジア考古学』6: 67-86。
- 後藤 健 1997 「アラビア湾岸における古代文明の成立」『東京国立博物館紀要』32: 11-114。
- 後藤 健 2000 「インダスとメソポタミアの間」「四大文明 インダス」178-192、日本放送出版協会。
- NHK・NHKプロモーション編 2000 「世界四大文明 インダス文明展」NHK・NHKプロモーション。
- 永嶺結季 2000 「インダス文明の宗教—ボダイジュと角の信仰」「インド考古研究」21: 59-68。